
モンスターハンターエクストラ

チャーシン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンターエクストラ

【Nコード】

N2384M

【作者名】

チャーシン

【あらすじ】

かつてそこにあつたはずの黄金時代。強力なモンスターを打ち倒し、英雄と呼ばれたり、さらなる高みを目指したりと…

だが人間が欲望を糧に進化していく中で、生態系の頂点とも言われたモンスター達は、ただの材料でしかなかった。 本日も各地で狩りが行われている。作業と呼ばれるに相応しく、達成感も何もなただ疲れるだけの狩りが…

しかしそんな中でも今だハンターとしての誇りや絆、名誉を維持しようとする者がいた。これはそんな時代の一つの特別な物語

変革時代（前書き）

初めてですがどうぞ読んでやってください。

変革時代

時代は進み、工房の止まることのない技術の発展、ハンター達の高まり続ける野心、そして何より、人々の形ないしかし恐ろしいまでの欲望。

もはやかつて王や神とも言われ続けていたモンスター達は生活維持、技術構造のためのエサみたいなものでしかなかった。他に意味を持たなくなった彼らの絶滅も近いことだろう。

かつて仲間とともに連携して、巨大なモンスターを狩り、街や村に住む人々、そして何よりギルドの協力あつて狩りができていたあの時代。その光り輝く時代は、人々の欲望により形もなくなき消されてしまった。もちろんこの欲望を抑えるための力も、ギルドという形でしかない組織でどうにかできるものではなかった。

効率化 今やそれが主流となっている。そこに正々堂々、自由奔放などのような個人の意思が入り込む場所などなく、作業と呼ぶのが正しい殺戮行為は何も生み出すことはなかった。ただ疲労と、何とも言えぬ脱力感だけが残る。

ハンターとしての絆や名誉、誇り、強敵を倒した時の喜びなど、感じることもできたのはいつだったか。

過去に英雄と呼ばれ、地方の伝説となったもの、未来を夢見る子供達の姿は、もうなかった。

残された者は、いかにモンスターを素早く殺せるか競い合う者、紙一枚に書かれた膨大な金額に目がくらんだ者、そして自分のように、ただハンターを続ける者。

「シビレ罨、そこそこに置いて」

声に我に返る。見ると他のハンター達がリーダー役に仕切られて、罨を設置していた。目を細める。遠くを見る様に。おそらくこの後

ターゲットがやって来て、着地点の罠に掛かり、動くことのできぬまま惨殺されるだろうと、未来が見える。

「まず痺れが切れたら閃光。そのあと睡眠落とし穴の流れでOK？」

「りょーかい」

「わかった」

リーダー役がこちらに顔を向ける。おっさんもいいか？とでも言うように。

「…ああ」

自分を除けば皆若い。今の若い者たちは工房の進みすぎた発展によりできた、最新兵器でどんなに力がないものでも、簡単に上級者レベルとなる。彼らの装備を見ると、太刀使いが一人、双剣使いが一人、そしてガンナーが一人。自分はいつもは槍を使っているのだが、効率重視の今、自慢の腕前は余計なものと罵倒されるのがオチだ。そのため、自分もガンナーをすることにした。

ふと、日差しが一瞬だけ巨影に隠される。来てしまったようだ、今回のターゲットが…。

橙色の鱗と甲殻、身体の所々に描かれた青い虎模様。原始的な風貌を残すその名の名は轟竜ティガレックス。翼が飛行に適しているため、墜落するように着地する。

丁度罠が仕掛けられたところへ…

「ハハッ！馬鹿な奴だ」

リーダー役の双剣使いが笑みを浮かべながらティガレックスに突っ込む。太刀使いの青年も続く。痺れて動けないティガレックスに斬撃の嵐が降り注ぐ。肉が切り裂かれ、鱗が飛び、血が吹き出る。

「そろそろだな。おっさん準備はいいか？」

「ああ…」

シビレ罠の効果が切れるところとなり、ガンナーが閃光玉片手に聞いてくるのに対し、適当に返事をする。睡眠弾を装填し、スコップで狙いを定める。

「そらよつと」

声と同時に爆発のような閃光があたりに広がる。悲鳴が聞こえた。もしかしくなくてもティガレックスだろう。後は睡眠弾を撃つて、穴に落として再度リンチで終わり。のはずだった…

「ひい！た、たすけてくれ！！」

その声に違和感がありすぎた。悲鳴はティガレックスのものではなかったのだ。見ると双剣使いがその剛腕により足を潰されていた。たちまち周りの空気が変わった。恐怖と困惑に。

「っクソ！！」

隣のガンナーが今一度閃光玉を投げる。光で視界が塗りつぶされる。

「どうだよ、これでおぶ！？」

隣を、巨大な岩がものすごいスピードで飛んで行った。あまりの風圧に身体が持つて行かれそうだった。若いガンナーはその岩とともに、血肉を撒き散らしながら奈落の崖下へと落ちていった。

「うわあああああああああ」

ガンナーの次は双剣使い。まだ動ける上半身を使って必死に助けを求めてくる。だが自分はそれをあつさりと拒絶した。

剛腕が振り下ろされ、その小さな体が地に埋まる。さすがに防具のほうは質が高いのかビクともしない。人間のほうは当然耐えられなかったようだ。そして奴は、こちらを向いた。全身に赤い血の流れる血管を浮かび上がらせ、興奮したような吐息を吐き、今にも襲いかかってきそうな形相で。

だが自分は怯まなかった。はずがなかった。待っていたのだ、このような効率化ですぐに終わるような相手ではなく、絶対にこれで勝てるという自信それすらも打ち砕くような強敵を。

これぞ絶対強者に相応しい姿。

「ハハハッ」

自分はいつの間にか笑っていた。残念なのが今あるのが愛用の槍ではなく、工房の発展による最新兵器であることと、これが恐らく

最後の狩りであることだ。

「よく笑ってられますね…」

声に対し横目で見るとそこには苦笑いした太刀使いの青年がいた。

「お前は逃げないのか？」

「その選択肢はないですよ」

青年は言う。背中から漆黒の太刀を引き抜ききちんと相手を見据えて構える。後は震えてなければ完璧なのだが…。

「どんなに効率よくやってたってこういうことがあるってのは決まっています。」

それに、と彼は付け加える。その目は良い目をしていた。

「俺ハンターですから。逃げるわけにはいきません」

そうか、と言い、ティガレックスに視線を戻す。死人となった二人と違い、この青年には何か期待できるものがあつた。ならここで死ぬのは勿体無い。今になって、この職業でやりたいことが見つかるとは思ひもよらなかった。

「なら一つ聞きたい」

「なんです？」

相手から視線を放すことなく、青年が応答する。

「狩るのはどっちだ？」

言ってから自分でも聞くまでもないというのが解り、笑みが出る。青年も同じ反応のようだった。

「そんなもん決まってるじゃないですか」

ティガレックスが咆哮し、こちらに突進してきた。さあ、来い。久々のおもしろい戦いだ。存分に楽しもうじゃないか。言っておくが狩るのはお前ではない、この おれだ

変革時代（後書き）

というわけで一話です。この狩りの続きはありません（笑）
ご意見、ご感想、その他誤字脱字の報告をお待ちしております！！

疾風黒影（前書き）

第2話です。ここから3話くらいにかけて第一部といった感じですよ（笑）

疾風黒影

深い森の中、あたりはすっかりと暗くなり、闇の世界へと誘うかのように野生生物たちが歌声を響かせる。

そんな中、生い茂る木々に隠れるように一点の光があった。それはこの闇の中では風前の灯のような小ささではあったがしかし、より輝いて見えた。ゆらりゆらりと上下左右に踊るように動くそれは、焚火の火によるものだった。

そこには野生生物以外の生命を感じる。同時に生命の危機を感じる……普段ならそうだ。

しかし、今日ばかりは自分達を襲いに来る奴の気配を一切感じるこゝとがなかった。そんな空気に、火に照らされた彼女の顔は、安心と不安の……光と闇の混ざった表情をしていた。

「……みんなもう寝たかしら。」

ずっと焚火の前にしゃがんでいたため、重くなった身体の上半身を捻りながら、あたりの様子を見回す。

そこは大木の根や、まだ成長途中の、いずれはこの大木のように育つであろう木々によって自然に造られた洞窟のような空間だった。木々には所々獣一匹くらい入れるような穴が開いており、そこからはまた別の生命の息吹を感じられた。

彼女は近づいて、穴の中のそれにそっと触れる。獣独特の、モフモフした感触が彼女手を撫った。

そこにいた、と言うよりも丸くなって眠っていたのは猫だった。しかしただの猫ではなく、人間のように二足歩行で、人間の言葉を理解するほどの知恵を持ち、あまつさえ巨大な外敵に立ち向かったりもする者たちだ。

彼女はその猫 アイルーから手を離すと大きく溜息を吐く。彼女自身にも眠気が襲ってきていた。しかしまた奴が来るかもしれない。いくら外敵と戦える力があるとはいえ、彼らにも限界

はある。巨大なモンスター達は彼らの攻撃などものともしない。そうして彼らの住処を何度も奪っていった。

（やらせない）

彼女は眠気を吹き飛ばすために首を左右に振る。その度に背中まで伸びた黒髪が揺れる。

アイルーから目を離し、振り返ると焚火の火が消えそうになっていた。火力を上げようと彼女が薪を足そうとした時だった

オオオオオオオオオ

獣のような、竜のような咆哮が響いた。：奴だ。

咆哮の大きさからして大分近くだ。以前奴に負わされた右肩の傷が痛む。

おそらく、今回で決着する。彼女はそんな予感をしていた。だが同時に何かが引つ掛かった。

それは、とてつもないほど嫌なものと、直観した。

なんにせよ、これで終わらせなければならぬ。ここは奴のフィールドでもあるから長期戦は部が悪い。しかし、奴のフィールドであると同時に、ここは

「私が守る。だって」

ここは彼女の家でもあるからだ。

「…ミヤビ？」

これから奴を倒しに行く。そんな時、不意に背後から声を掛けられた。

振り返るとそこに立っていたのは眠そうに眼を擦るアイルーだった。その眼差しは、家族との別れを惜しむ人間のものに酷似していた。

「…起こしちゃったか」

人差し指で頬を掻きながら苦笑いをする。

「ダイジョブ、またすぐ帰ってくるから…」

彼女 ミヤビはアイルーに近づきその頭を撫でてやる。すると気持ちよさそうに唸るのだ。カワイイ。

「じゃ、いつてくるね」

軽く手を振り、余計な心配を与えないように明るい声を投げかける。
おそらくこれが最後。

だからこそ…だ。

それだけ言つとミヤビは走り去つて行つた。

「火…水ないのにどうやって消すニヤ？」

木々の間を走り抜ける。まるでどこか別の世界に迷い込むための通路のようだ。自然とは素晴らしく、恐ろしいものだとしみじみ思う。それはまた別の話だが…。

そんなことを考えているとやがて大木の根のトンネルを抜け、広い場所に出た。そこは、この森の中で一番の巨木の中だった。

そして 奴はいた。

獣のような、具体的には豹のような姿をしている、黒い毛並みのモンスター。

しかしその頭部には鳥のような嘴があり、その前足には刃のような翼があり、そしてその長い尾はムチのように撓っていた。

迅竜ナルガクルガ

獣のような見た目をしているが、立派な竜の一種であり、名の通り素早い動きで相手を翻弄、その鋭い獲物で相手を仕留める。このあたり一帯を縄張りとしており、アイルー達の集落を襲う原因でもある。

ナルガクルガは彼女発見すると一際大きな咆哮を上げた。

ミヤビはそれに動じることなく愛用している弓を展開し、矢を構える。狙いは勿論、ナルガクルガの額ど真ん中だった。

「そろそろケリ着けようじゃん」

互いに様子を見る。しかし互いに構えを崩さない。ナルガクルガは姿勢を低くし、いつでも飛びかかれるように、ミヤビはずっと標準を一点に合わせている。

空気を読むように一際強い風が吹く。それにより木の葉が舞い上が

り、そして地に落ちる。

それが戦いの合図となった。

彼女が矢を放つのと、迅竜が飛び掛かるのはほぼ同時だった。

青年は人が滅多に立ち入ることのない樹海の地を踏みしめていた。今現在のような真夜中なら尚更だろう。月はほぼ真上に来ていた。草木で足を踏み外さないように手元のランプを巧みに使う。揺らす度にランプの明かりに寄ってくる蛾が非常に鬱陶しかった。そもそも彼は何故にこんな辺境までやってきたのだろうか。理由は、彼が師と尊敬する者の言葉にあった

『テスト…ですか？』

青年は師のいきなりの言葉に思考が追いついていなかった。そのため師が放った言葉をそのまま聞き返してしまう。

『ああそうだ。内容はいたって簡単。オレが言った地へ赴き、そこにいる魔物を駆逐すること』

青年が座っているよりも高い岩の上に、胡坐を掻いている中年の男はそう言い放った。

その顔は、これからおもしろいことが起きるであろうことを楽しみにしている顔だった。

『…ですが何故今になって…！？』

『あゝ、ストップ2乗』

予想範囲内の反応に手で制す。男は溜息を吐くとまるで説法を教えるかのように言い放った。

『いいですか？ゼノ君。オレについてくるなとは言わないけど。いや寧ろ飯とかとにかく金に困らないし非常に助かっている。だからここからで一旦世界を見てくるといい。あ、オレは見飽きてるからパスな』

男はそれだけ言うと、傍にあった酒の入ったビンに手を伸ばし、一気飲みをする。

ゼノと呼ばれた青年は師の意図がまったく見えなかったので納得できなかったが、それを了承することにした。

『わかりました…。ではまずどこに？』

『んゝ、そうだな』

男は顎を擦って少し考えるとやがて思いついたように手を叩く。

『決して人が踏みいることがない未開の地があつてな、今そこに黒い悪魔が来てしまったらしいのさ』

『悪魔？』

『そう、非常に貪欲で凶暴な奴だ。まずはそいつを狩ってこい』

そう言われてゼノは今この深い樹海に来ている。

今まで師と一緒に沢山の敵と戦ってきたが、あの様子だと今回の相手はまだゼノが見たことのない相手だろう。しかも、一人だ。油断はできない。

ふと、気配を感じた。それは、先程からせせら笑うような野生動物のものではなく、もっと強大な、殺気によるもの。

それが目当てのものかどうかは判断ができないが、ゼノはそれを頼りに進むことにした。

この無限に広がるかのような、夜そのものとなっている大地を

刃が振るわれる度に、巨木の一部が挟まれ、空間が斬り裂かれる。

矢が放たれる度に、風ができ、空気が打ち抜かれる。

迅竜と少女の戦いは、想像を絶するものとなっていた。どちらも退くことを知らない。身体の一部が傷つこうが、その瞳に映るのは敵の姿のみ。

ナルガクルガは素早い身のこなしで、まるで残像を残すかのようにあたりを飛び回る。地を、巨木の壁を、そして空中を縦横無尽に飛び回る。

対する少女 ミヤビは一度手を休め（それでもいつでも矢を放てる状態）、相手の動きを待つ。

一応横目で様子を見たりはするが、空気の流れて相手を追うようにしている。彼女が狩りに行く時、いつも身軽な格好なのはそのためだ。

少女が目を瞑る。こうした方がより確実に相手の姿を捉えることができる。ナルガクルガが空中を飛び回り、次に攻撃を仕掛けてくる方向、空気の流れて追ったそれは

矢を自らの真上に放ち、同時に後方へバックステップ。直後聞こえてきたのは、ナルガクルガの悲鳴。見ると右目を打ち抜かれていた。

その後は、着地に失敗し、大勢を立て直すまでの数秒間。その間にその眉間をぶち抜く。

それが彼女の予想だった。しかし

「……!？」

悪寒を感じて攻撃に転じることなく、その場に土下座するかのようにしゃがみ込む。直後、真上を丸太のような影が風を切る轟音とともに通り過ぎて行った。嫌な汗が全身から噴き出し、心臓が跳ね上がるほど鼓動している。汗で濡れた顔を上げるとそこに見えたのは、片方だけ輝く、この闇に相応しい、血のような揺らめく光と黒い巨影。その背後には、先に頭上を振り抜いたであろう、ムチのような尾。その尾は今、棘の付いた棍棒となっていた。

その様子を見れば、相手はまだ退く様子はない。寧ろその逆だ。

「……やっぱり簡単にはいかないか」

思えば簡単なことだった、今ここにいる人間も竜も、かつて互いに均衡を保つように狩りあったものと違うのだ。今ここに存在するのは百戦錬磨の強者のみ。強くなりすぎた人間たちに屈することなく勝利してきた。

今のこの世界にはそれらしいないのだ。

気持ち切り替えるために大きく深呼吸をする。対するナルガクルガは尾数回振りまわすと、逆立っていた棘を弾丸の如く放つ。

ミヤビはそれに対し、横に避けるのではなく、ナルガクルガに近

づくように前に走り出した。

弾丸は先程彼女がいた場所と、その周囲を蜂の巣にしていた。

「甘いよ」

ミヤビは腰にぶら下げた筒から矢を数本取り出すとそれをまとめてナルガクルガの左前足に放つ。鱗が飛び、血が吹き出る。ナルガクルガは低く唸ると、距離を取るために後退した。

先のこともあり、息が荒くなる。だがそれは相手も同じ。ここからが正念場だ。

一気に畳むか、持久戦か。彼女の答えは一つだった。

「……困ったニヤ」

そこには3匹のアイルーがいた。互いに焚火の周りで胡坐をし、腕を組んで考え事をしている。

まるで旅行に出掛けた方がいいが、地図を持っておらず迷子になったという感じにも見える。実際はそんなことではなく、消されることがなかった焚火が彼らの予想を遥かに超え、大きくなっていった。

「このままでは火事になるニヤ」

「湖にいけば水は確保できるニヤ」

「ダメニヤ、姉さんにはここを動かすと言われてるニヤ」

この閉鎖空間から出ることはできない。自分達の住処だということに不思議なことだった。思えば奴が現れてからここを出ていない。奴が現れてから彼女がやってきて、それから彼女に任せっきりだった。

「あれ？どこだここは？」

不意にこの場にいる者以外の声がした。アイルー達は突然の事に三位一体となり、身体を震わせながら声のした方を見る。

そこにいたのは一人の青年だった。青い鎧を身に纏い、漆黒の刀を背負っている。丁度170後半ぐらいの背丈だろうか。しかし、

背中
の刀は彼の身長より、大きいものだった。青年は眉間に皺を寄せながらあたりを見回していた。

「…あんだ誰ニヤ？」

アイルーの内、桃色の毛並みをしたアイルーが問う。この地に彼女以外の人間がいると思っていなかった。青年はその声でようやく彼らの存在に気が付いたようだ。

「猫さんではないか。遠くで殺気を感じて来てみれば、小さな灯が見えたからもしやと思ってたんだが…君らの住処だったか」

どうも彼は通りすがりの人間らしい。彼は続ける。

「なんでも今この地に黒くて凶暴で四肢を持つ奴がいると、とある人物に聞いてね。そいつを駆除してくるように言われたのさ」

これが彼の目的らしい。そして今の彼の言葉には、思い当たる節がいくつもあった。

（黒くて…）

（凶暴…四肢を持つ）

（もしかして…）

三匹は互いに顔を見合わせ、頷き合う。こいつしかない。

「…ナルガクルガ」

それを聞くと青年は、いつの間にか取り出した一枚の用紙を見て、ギャンブルで当たりを引いた時のような、少し不気味な笑みを浮かべていた。焚火の明かりがそれをより一層引き立てていた。

巨悪襲来（前書き）

あと1話で足りないかも…

巨悪襲来

元・樹海エリア4

先程までざわめいていた野生生物の声は聞こえない。それどころかそこに生物が存在する気配すらなかった。聞こえるのは肉を貪る音、骨を砕く音、血を啜る音だけだった。

巨大な影に、無茶苦茶に食い荒らされる草食竜の死骸。先程まで生き生きしていただろうその姿は、無残なものへと変わっていた。

影は重たい頭部を上げ、その闇のような眼であたりを見回す。その顎からは血が滝の様に流れ落ちている。空腹を満たした時の何とも言えない幸せ。それは全生命が感じるものだと思う。だが勿論、生きるためには結局、何らかの命を犠牲にしなければいけない。草食種は草を食べ、肉食種は彼らを食す。そして人間はどちらもだ。一つが成長し続けると、他がいなくなってしまう。今の様な世界の状態がそうだろう。これに近い。

それはまた別の話。いつの間にやら骨の残骸と化した草食竜の死骸。影の主は、死骸を無造作に蹴散らすとその場で天に向かって咆哮する。今だこの場を離れてなかっただろう鳥達が一斉に空へ飛び立つ。影の主は歩き出す。ゆっくりと。血の匂いを嗅ぎつけて

両者は睨み合いつつも、笑みを浮かべていた。

片方は方目を打ち抜かれ、背や尾に何本もの矢が刺さり、そこから滝の様に血が流れている。

そしてもう片方は、身体に目立った外傷はないものの、壁際に追いつめられ、残った最後の一本を引き構えていた。

次で決まる

それすなわちどちらかが狩られる。

（至近距離ならいける…）

ミヤビは考えた、というより自信があった。一気に間合いを詰めば敵は恐らく怯む。相手がこちらのタイプを知っていればなおさらだろう。だからこれまでもなるべく距離を取りながら戦ってきた。しかし、もし奴がそれを見極めてたら？だとしたらこれはあまりにリスクが大きい。だからこそ手がなかなか出せないでいた。

（今更何を…それでもあの子達を救えるのなら！！）

一人孤独だった自分を受け入れてくれた彼らのために少女は決断した。同時にナルガクルガが飛ぶ、真横に。

（！？）

標準がずれた。また標準を合わせなければ、しかしそのころには奴の一撃が…。

読まれていた、完全に。ギリ、と歯を食いしばる。敗北を予感した。

キイイイイイイン

その時だった。丁度ナルガクルガの後方から甲高い金属音が聞こえた。

音に敏感な種であるナルガクルガは思わず音に振り返る。そしてミヤビにとってはこの上ないチャンス到来だった。第三者が誰かは知らないがそれに気を取られることなく標準を合わせる。

慌てて今戦闘中だということを理解してかナルガクルガが振り返る。しかしその時には一本の矢が額を貫いていた。

ビクビクと身体を痙攣させると、そのまま声を上げることなく地に崩れ落ちた。

「…やった？」

ほとんど肩で息をする。しばらくしても動く気配がない。どうやらやったようだ。

安堵の息と同時にその場に座り込む。正直危なかった。第三者による、音爆弾の金属音がなければ間違いなくやられていた。少女の

心の中は、一対一の勝負に余計なことしてくれた不満と、助けてくれた感謝の気持ちでいっぱいだった。なんとも不思議な感覚だった。その後、急激に睡魔に襲われた。かなり無理をしていたことは自分でもわかる。

ジャリ、と横から足音が聞こえた。ぼんやりとした視界でその姿を捉えたが、結局そのまま意識は途絶えてしまった。

「おりよ？死んだ？」

言葉とは裏に、内心かなり焦って少女に駆け寄る。しかしよく見ると静かに寝息を立てているだけだった。その様子に、ゼノは安堵する。自分が近寄った瞬間に命を落としたとなれば、猫達に死神扱いされてしまう。

「とりあえず、失礼しますよつと」

少女の武器である弓を傷つけないように畳んで、腰に紐で括り付けると、少女を起こさないようにお姫様だっこした。驚くほど軽かった。

後の処理は猫達に任せるとして、青年は迅竜の死骸を見た。

命は失われていても、月明かりに照らされたその黒光りする体毛や鱗は今だ生き生きとしていた。

（それにしても…）

視線を戻し、少女を集落に運び始める。

（師の言っていたモンスターはこいつじゃない…んだよね）

仮にこいつだったとしても困るのだが。

視線を落とし、気持ちよさそうに眠っている、少女の顔を見る。

このままそうさしてあげたいが気の毒だがそうもいかない。彼女にとって一難去ってまた一難となるだろう。それを考えるとかわいそうだ。そもそも彼女がここにいる理由が解らないのだが、それは彼女から見ても青年が何故ここにいるのか解らないだろうし、まあ面倒なことは考えないでいた。それよりも

（長い夜に…なりそうだな）

月は現在、真上に来ていた。

自分も最大限の準備をしよう。少女の戦いを見て解ったが、この連中は尋常じゃないくらいの強さだ、おそらく原因は

二人の人間がいた。一人は幼い私。もう一人は、いなくなった父親。

父はハンターだった。狩りから帰ってきたときはいつも私の頭を撫でてくれた。私を抱いてくれた。村の皆からも、大人達からは評判で、子供達には目標にされるほどだった。

だが、ある時を境に父は帰ってこなかった。何日、何ヶ月、何年待っても。

そしていつしか父の存在は忘れ去られていた。

でも私は今でも信じられていない。受け入れられていない。父が死んだなんて嘘だ。何より証拠が一切ないのだから。だから追うことにした、父の行方を。

だから、私もハンターになっていた。父を捜すために、父を追うために、その力を得るために。

だが、ほんの数十年、時代は変わった。楽な狩りができるようになったため、力がある者は逆に軽蔑されるようになってきていたのだ。

それが私には耐えられなかった。自分の存在を、父の存在を否定されてるように感じたから。

ある日の夜、村を飛び出した。行く先はなかった。ただ遠くに、逃げるように。

涙を流しながら誓った。父を見つけ出し、そして変えてやる。こんな時代。

「…ん」

目を開けると光が広がる。と言っても薄暗いオレンジ色の光だが。重たい上半身を起こす。そこは見慣れた集落の景色だった。

眉に掛かる前髪を掻き上げる形で額に手を当て、これまでの記憶を辿る。自分は確かに迅竜を倒した。頼んでもいない誰かさんの援助を受けて。

「そうだ…そのまま寝ちゃったんだ…」

とにかくその誰かさんの正体を知りたいので、そのまま身体全体を起こす。すると向側から声が掛けられた。

「やあ、目が覚めた？」

そこには一人の青年がいた。

「あんた…ダレ？」

「俺？通りすがりのハンターさ」

見ると確かにその通りだろう。何やら青い棘々しい鎧着てるし、背中に太刀を持っている。

「…私を助けたのも、あんた？」

青年に次の質問を投げかける。青年はまさにその通りですよ、という感じの素振りを見せたので、そう、と返す。

「じゃあ…」

何か彼にはいろいろ言いたいことがあった。邪魔したことを怒るべきか、それとも素直に助けてくれたことを感謝すべきか。この時何故か決めることができなかったのだ。

「お礼！！」

何故か青年を殴り飛ばしてしまった。

時代は変わったものだ。

今の時代は人助けすると殴られるのか。これは知らなかった、自分の不注意だろう。

背中から地面に落ちる。背中の太刀が食い込んでダメージが倍増する。なにやら向こうで助けた少女が顔を真っ赤にしてあたふたし

てるが、それはこっちも同じだ。

「…ごめん」

向こうが素直に謝ってきた。

「いや…」

頬を擦りながら身体を起こす。正直殴られた原因が不明だが、それよりも今は大事な話があった。

「なんで殴られたかよくわかんないんだが、こっちも一ついいか？」
「なに？」

と言いながら身構えている少女。別に何もするつもりはないのだが…
「こいつを知ってるか？」
言って一枚の用紙を少女に渡す。次いで

「今この地にそいつがいるらしい。それを駆逐して来いって、とある人に言われていてな」

「……恐暴竜…？」

いいところに食料を発見した。

死んではいるが、まだ時間が経っていない。これなら十分だ。

そんな様子で、影は迅竜の死骸に食らいつく。強靱な鱗はあっさりと噛み砕かれ、肉を食いちぎる。影の正体は月明かりに照らされて、薄らとその姿を見せていた。

全身を覆う、暗い緑色の鱗。幾多の戦闘を乗り越えてきたであろう、全身にある無数の傷跡。

そして、血と酸性の唾液を漏らす、巨大な口。そこに生える、大小不釣り合いな多数の牙。

ある程度迅竜を食すと天に咆哮する。同時に首から背中にかけての筋肉が大きく盛り上がり、傷跡がよりはつきりと浮かび上がる。

まだ人間が変革を遂げていない時代。こいつの存在によって一部地域の生物が絶滅に追い遣られたことがある。原因は、こいつが常にエネルギーを欲すること。そして、それを求めるためならどこへ

だっ
て行くのだ。そして今回はこの地にやってきた。
恐暴竜イビルジョーが。

暴飲暴食（前書き）

3話とか無理でした（笑）

暴飲暴食

僅かな、しかし力強い揺れが、集落に起こる。

「どうやら向こうから来たみたいだな…」

「……………」

それは新たな異変が起きた証拠で、新たな敵が現れたことを意味するできごと。

「聞いたところで悪いけど、俺行くわ」

「待つてよ、状況がよくわからないんだけど？」

これから戦場に向かおうと、少女に背を向けた時、背後から声がかかる。

実際、状況が理解できないのも無理はない。たった数刻前に激戦を終え、そしてたった今、敵が現れたというのだから。平和な時間を満喫する間などない。彼女も、猫達も。

「詳しいところは猫達に聞いてくれ」

青年は少女の方を見ずに答える。

「だがこれだけは言える。これは俺の戦いだ」

そして青年は、そのまま歩み進むのだった。

「……………」

「…にゃ〜」

「……………」

彼女の背後から声を掛けても反応がない。間違えなく聞こえているはずなのだが、こつも反応がないとやりづらい。

「……フフフ」

ぎよつとして見てみると、少女は肩を小刻みに震わせていた。

「あの…ミヤビ…さん？」

「キナ〜」

突如、少女が名を呼び、振り返る。ちなみにキナというのは、薄

い橙色をしたアイルー、つまり自分の名だ。

「な…何ですかニヤ？」

額に薄ら汗を浮かばせながら聞く。少女のその顔は笑ってはいたが、目が笑っていないかった。直観だが、こういうのは非常に危険だと思う。ちよつとの刺激で爆発するからだ。少女は表情そのままでジェスチャーを送る。

「私の狩りの準備をお願い」

何本もの、アーチのように架かった木の根を潜り抜け、細い道を抜け、ゼノは巨木の中の開けた場所へと戻ってきた。そしてそこには、待ち構えるように一つの存在があった。

今し方、食事を終えたばかりだろうか。奴の背後には迅竜であつたであろう肉塊が転がっている。首をゴキゴキと鳴らし、強張つた身体を解すようにあちこちから同じような音を鳴らしている。そして血に塗られた顔にある、二つの眼がゼノを捉えた。

恐暴竜イビルジョー

以前ならば、最上位レベルのハンターしかお目にかかれないレアなモンスター。否、それほどの人間でなければ相手にしてはならないほどの猛者だった。最も、今はハンターランクなど形ではないため、見かける人間も多いだろうが。

それほど高いレベルのモンスターを一人で狩るなど、いつ以来だったか。そもそもここ数年はずっと師と行動を共にしてきたから、一人で倒せるかどうか。

（答えるまでもねえ…やるしかないのさ）

背中から、自慢の愛刀を引き抜く。巨木の崩れた部分からできた穴から差し込む月明かりに照らされた、白銀の刃をイビルジョーに向かつて構える。

対するイビルジョーは、絶望そのものと言える巨大な口を開き、威嚇する。

時刻は丁度、丑三つ時。真の闇の戦いが幕を開ける。

先に仕掛けたのはゼノだった。

身体を低くし、一気に相手との距離を詰める。イビルジョーはその小さな身体を踏み潰さんと後ろ脚を大きく振り上げる。

ゼノはそこで、振り上げているとは反対側の足の側面へ回り込む。同時にイビルジョーが足を振り下ろし、大地が大きく揺れる。しかしゼノは怯むことなく、一閃。結構力を加えたのだが、斬撃はその巨体に僅かに傷を付けただけだった。

（なるほど…さすが師が目付けたモンスター）

いきなりテストと言いだすから、どんな奴が相手かと思ったが、なるほどこれは十分すぎる相手だ。

全身にある傷の様子からしても、かなり年月の経った古傷も見受けられる。恐らくハンターの行動及びアイテムの効果はある程度理解しているはずだ。

（となると罠は効かないかな…）

元々使うつもりなどなかったが、念には念をという感じで一応所持はしている。

どうもこれを使うのは好きではなかった。と言っても、師と出会うあの日以前は都合上バンバン使っていたが…。

そんなことを考えていると、イビルジョーが大勢を低くし、山の様に盛り上がった肩を突き出して突進してきた。

ゼノはそのままダイブしてかろうじて回避する。頭上を巨大な影が通り過ぎる。

手応えがないのが解ってかイビルジョーが動きを止める。その隙に尾の付け根や後ろ脚に一閃、二閃。今度は先程よりダメージが与られたようだ。

（よし…このまま一気に…！？）

勝負を着けようと思ったわけではないが、深刻なダメージを与えておきたかった。

だが無理だった。

イビルジョーがその場で回転し、大木のような尾を振り回してきたからだ。

直撃は免れたが、その勢いに身体が持つて行かれそうになる。すなわち、動きが止まってしまう。

（しまっ！？）

慌てて、大勢を立て直したところで、振り返ると、そのまま逆回転したイビルジョーが、今一度尾による攻撃を仕掛けてくる。

今度は回避できず、盛大に吹っ飛ばされる。

「ぐあっ！！」

背中から胸へ、強い衝撃が走る。痛みに耐えつつ、吹き飛ばされながらもなんとか体勢を立て直し、衝撃に備え、受け身を取る。

ズザア、と地面を滑り、スピードを落とす。危うく根の一部に激突するところだった。

（あぶなっと！）

背後から嫌な気配を感じ、咄嗟に勘だけで横に跳ぶ、案の定、追撃に来たイビルジョーがその顎でゼノのいた場所を噛み砕いていた。

ゴバアツ！と地面が噛み砕かれたことによって、いくつかの瓦礫が飛んでくる。それから身を庇う為、どうしても視界が遮られる。

だがそれは相手も同じ、そう思っていたが

（っ！？マジかよ！！）

驚くべきことにイビルジョーはそのまま地面を抉り、巨大な岩塊を放ってきた。

勿論これは回避、当たりたくもない。

（さてと、どうしたものか…）

一旦距離を置き、ゼノは考える。

敵は獣竜種と言われるタイプのモンスターだ。彼らは後ろ脚の脚力が発達している分、前足が発達していない。狙い目はそこなのだ。つまり前足が発達していないということは、胸や腹を守るための部分が発達してないということでもある。そうだとい。そう信じた

い。下に潜り込んで、腹や胸を一突きすれば…。

だができないでいた。太刀は間合いが非常に重要だ。下手に突っ込めば、逆に自殺することになる。この場合、一人ではあまりにつらい。

ゼノはそれが解って、奥歯を噛み締める。

「俺の戦いだ」なんてよく言えたものね。早々に詰んでるじゃないの」

直後、背後から数本の風が横切った。

否、それは誰かが放った矢だった。それはそのままイビルジョーの身体に突き刺さる。

今度は悲鳴に近い声を上げていた。

振り返るとそこには、あの少女がいた。呆れたような表情で。

「おま！？なんでここに…」

「なんでって、狩りによ？」

笑顔でそう答えているが、どこかぎこちない。明らかに無理をしている。

それもそうだろう。ほんの数時間前に激戦を終えたばかりなのだから。

「アホだろ…」

「なんか言った？…今はそんなことより………」

視線をイビルジョーに戻す。獲物が増えた喜びか、傷つけられた怒りだろうか。

どちらかは解らない。だがこれだけは解る。奴は本気だ。これまでは余興だったのだ。

恐暴竜が、真の姿を見せたのだ。

核爆弾猫（前書き）

次回で一区切りになりそうです。

核爆弾猫

ビキビキという音と共に、イビルジョーの影がより一層大きくなる。

首から背中、筋肉が山の如く盛り上がり、血管や古傷がこの暗闇でもはつきりと赤く色づいて見える。口からは酸性の唾液をボタボタと雨のように垂らし、地面から蒸気を発生させていた。

「うお、マッチョになった！ここからが本番か…」

「パワー系か。さつきよりマシだといんだけど…」

興奮し始めたイビルジョーの姿に戦慄する二人。固まってる二人にイビルジョーはその巨大な口を、可能な限りまで大きく開き、隙間なく顎にまでびっしり生えた牙で噛み砕かんとする。

二人は同時に別の方向に回避、ゼノはそのまま足に太刀を一閃。ミヤビは貫通性の高い矢を首へ放つ。

ガキイ、と金属同士がぶつかり合ったような音がし、刃が弾かれ、矢は鱗に当たり、軌道を変えられ、壁に突き刺さる。

（肉質がさつきとは別物だな…表面がこれならやはり狙うは…）
ミヤビが今度は腹に向かっていくつも矢を放つが、尾の一撃ですべて叩き落とされる。

（…思った通り、そこが弱いね）

イビルジョーは、ミヤビを噛み砕かんと首を下から振り上げると同時に、その勢いで尾を振り回してゼノを吹き飛ばそうとする。二人はもちろん回避したが、

（…っ！？）

逆に避けられるのが解っていたように、勢いで身体を180度回転させ、今度は先とは逆の標的に別の一撃を繰り出す。咄嗟の行動に反応しきれず、無造作に振り回された尾の一撃がミヤビの左肩を掠め、防具の一部が弾け飛ぶ。凶悪な顎の一撃を、ゼノはなんとか回避するが、代わりに噛み砕かれた木片や瓦礫が彼に襲いかかった。

左肩を抑えつつ、一先ず距離を取る。本来なら先の一撃など避わすことぐらい造作もないのだが、やはり体力も集中力も回復しきれていなかったようだ。

左肩から手を離すと、皮膚が破けており、血が流れ出していた。弾け飛んだ防具の破片にやられたようだ。しかし、狩りに大きく支障が出るものでないと解ると、すぐに次の矢を構えなおす。

今まで触れてはいなかったが、彼女 ミヤビの防具は一言で言う
と黒い忍びのようなものだ。とても身軽なため、相手の攻撃を回避しやすいものとなっている。その分肌の露出が多く、脆いという欠点もあるのだが。これは一昔前は一般的にナルガシリーズと呼ばれていたりもしたが、最近のハンターは最上位レベルばかり相手をしており、樹海が狩場として閉鎖された今は出会う人間も少ないだろう。

（戦ったことない相手はどうもやりづらいわ…頑張らないと）

それよりも、と彼女は横目で集落の穴の方を見る。

（あいつに何吹き込まれたか知らないけど、随分やる気だったわね、あの子達…）

何をするつもりなんだか…俺の戦いとか言いながら、なんだかんだこの場にいる全員の戦いになってきていることに、ただ苦笑いした。

「準備はいいかニヤ？」

「OKだニヤ」

「ほんとにやるのニヤ？」

場所は集落の屋根となっている大樹の中枢部分。何時の日だか、落雷によりぽっかりと空いた空間に三匹のアイルはいた。その背後には大量の大タル爆弾。

数刻前

「あ！帰ってきたニヤー！！」

激戦より無事帰還した少女が、青年に抱きかかえられて帰ってきた。
「どこか寝かせられる場所は？」

青年にそう聞かれたので、あっちですニヤ、と手で案内する。青年は言われたとおりの場所に少女を寝かす。

彼らを脅かしていた迅雷ナルガクルガは無事に討伐された。これで彼らの生活にも平和が訪れた。はずだった。そんな彼らの浮かれ気分を粉碎するように、青年が口を開く。

「まだ終わらんよ」

「……へっ？」「」

三匹三色揃って変な声を上げてしまう。言葉を理解する前に、青年が続ける。

「俺が搜していたのは残念ながら迅雷じゃないんだ。師が言うのが本当ならそう遠くない未来にそいつと鉢合わせすると思う。」

それで、と青年は横目でチラリと眠る少女を見る。

「あいつは無理するタイプ？」

正直頭の中で処理が追い付いていなかったが、今の言葉は理解できた。付き合いは短いながらも、彼女のことはよく知っている。

「僕らのためとなると……」

「そうか」

じゃあさ、と青年は再び口を開く。真剣な、とても強い眼差しだった。

「多分無理するだろうから、おまえら援護してやれよ。できるだろう？」

少し言葉に詰まる。確かに彼女が来る前は自分達でできる限りのことをしてきた。だからと言って彼女の力になれる自信はない。

「それによ……」

そんな彼らの困った様子を見てか青年は再度口を開く。今度は少年のような、無邪気な表情だった。

「守られてばかりのも、つまんねえだろ？」

この言葉には、心に来るものがあつた。心のどこかにあつたのか

もしれない。人に頼ってばかりではなく、自分達も同じ戦場に立ちたいという、闘争心のようなものが。

数時間後

「私の狩りの準備を」

眠りから覚めた少女がそんなことを笑顔で言い始めた時はやはり焦った。しかし、先の青年とのやり取りで改めて理解はしている。案の定、彼女は無理をしている。だが、

「わかったニヤ。気をつけてニヤ」

そう言つて彼女の狩りの準備に向かった。他の二匹も同様だ。矢のストックやアイテムの確認を終え、彼女に渡す。

「なんか…やけに素直ね」

てつきり止めるかと思っていたのだろう。実際そうしたい。でもどうせ断られるなら…

「大丈夫！オイラ達も頑張るニヤ！！」

にやあにやあと声を上げる。何を頑張るのか張り切っている彼女を見て、彼女はただ頭に？マークを浮かばせるだけだった。

穴の中から、ハンター達の戦いをこっそりと見る。今は頃合いではない。

彼らの作戦、それはこの大量の大タル爆弾を転がし（もとい放り投げ）、標的の注意を逸らすと同時に、ダメージを与えることだ。

彼らの思いはただ一つ。彼女の助けとなることだ。

「まだニヤ…まだニヤんですよ」

「そうニヤんす」

「…………ニヤ」

彼らの戦いを静かに見守る。見ているこちらとしても重い空気により一層緊張感が高まる。

「…そろそろ？」

「うんニヤ。今出たらアウトだニヤ」

「……真の力を見せてやるニヤ」

しかし、彼らは重大なことを忘れていた。

その時、一際強い風が吹いた。地面から砂埃を上げ、小さな竜巻とも言えるような風が。その風が、弱まっていた集落の焚火の火を巻き上げた。火は舞う。その真上には、大量の大タル爆弾。

「……ニヤ???」

嫌な予感がして後ろを振り返れば、そこには導火線に火の着いた大タル爆弾が多数。

直後、樹海全土を揺るがすような轟音が、まだ夜明け前の世界に響いた。

「なんだ!？」

この場にいる全員、イビルジョーでさえも揃って音の源に目を向ける。

見ると、集落の屋根となる大樹が、中枢のあたりですごい勢いで燃えていた。時間帶的に（もうすぐ朝だが）、キャンプファイヤー見たいな感じだ。それにしても規模があまりにでか過ぎるが。

「~~~~~!!!!」

悲鳴にも似たような鳴き声が、頭の上から聞こえる。声の主達はそのまま華麗に着地……できず頭から地面に突っ込んだ。

「……大丈夫か？」

とりあえずそのうちの一匹の足を掴み引っこ抜いてやる。完全に伸びていた。少女も気付いたのか一度弓を畳んで、駆け寄ってくる。

「ちょ……あなた達何してんの!？」

怒る、と言うよりも驚きの表情をしていた。それはそうだろう。誰だっけ驚く。ゼノ自信もかなり驚いた。

ズン、と大地を踏み鳴らす音がして、今自分が狩りの最中だったということに、意識が戻る。

少し邪魔が入ったがなんてことはない、とてもいいかげな顔だ。イビルジョーは再び大地を揺るがすほど、大きく踏み鳴らす。バ

ツクが燃えているので、爆発で死んだはずの強敵が死んでなかったという絶望が感じられてしまう場面だ。

ズン、と再び音がする。しかし、今度はイビルジョーが起こしたものでなかった。

奴の背後を見ると大樹が揺れている。最初は火の熱で揺れているだけかと思ったが、そうではないようだ。だとすると…

「…逃げるぞー!!」

刃を鞘に収め、いつの間にか引っこ抜かれていたアイルーの足をそれぞれの手で引っ掴むと、全力で走った。

「え！？逃げるったってどこに…!!」

少女の顔が困惑から再度驚きへと変わる。向こうも気が付いたようだ。

「どこへだつていい！とにかく遠くへ！巻き添えくらうぞー!!」

巨大な火柱と化した大樹が、ゴウ、と音を立てながら、倒れてくる。その状態にイビルジョーは最後まで気が付かなかった。

次の瞬間。今度は樹海全土を揺るがすほどの轟音と地響きが起こった。

「…そっちは大丈夫か？」

ハアハアと荒い息をしながら、生存確認を取る。

「なんとかね…」

向こうも同じように荒い息をしている。ハンターをやっているれば多少なりと事故に巻き込まれることはあるが、これはさすがにない。

それはモンスターも同じだろうが。

「そんじゃあ…」

ゼノは立ち上がると、アイルーを安全なところへと放置し、刃を引き抜く。その視線の先には黒い巨体。その頭部は自らの血で濡れていた。あの一撃で生きていることが正直驚きだが、かなり体力を削れたと思う。自分の実力で、じゃないのが残念だが。

イビルジョーが定まらない瞳でハンター達を見る。

すでに日が昇り始め、空が明るんでいた。
深呼吸をし、太刀を構える。矢を構える。顎を振り上げ、口を大
きく開く。

「これで最後にしようか」

共歩同氏（前書き）

これで樹海編は最後です

共歩同氏

まだ少し火の灯った、炭化した大樹を蹴散らせながらイビルジョーが迫る。気のせいかな先程より唾液の量が異様に増えた気がする。ゼノは以前、師にあることを聞いたことがあるのを思い出した。

それは、モンスター達を鈍器などで頭を殴ると、モンスター達のスタミナを減らすことができるというものだ。人間同様、スタミナの減ったモンスターは疲れ果てて、攻撃も単調なものになったり、ブレスが吐けないといったことになる。そう言ったモンスター達はスタミナを回復するために、草食竜などを食しに行くのだ。

（つまりこいつは…）

考えるまでもなく、疲れている。人間だって頭に重い一撃をくればフラフラする。それと似たようなものだ。勢いの付いた火柱の一撃を、頭部に喰らったようだ。あまり動き過ぎると、倒れてしまうのではないかといった状況に見える。

幸い、今の出来事でイビルジョーの主食となる、“肉”は自分達以外逃げてしまったようだ。今がチャンスだ。猫達いい仕事をしてくれたと、ゼノは内心で感謝する。

（礼をするのは、すべてが終わってから！！）

今度は朝日に照らされ始めた、白銀の刃を、その頭部に斬り付けた。

ミヤビは一人戦慄していた。悪寒を感じるのだ。

アイルー達は皆安全なところ（狩場に安全なところなどほとんどないが）に避難させ、こちらに死傷者は居らず、イビルジョーには予期せぬ深手を与えられたというのだ。

（おかしい、何か引つ掛かる…）

ハンターとしての勘か。それとも他の何かか。彼女の頭の中で警報が鳴り響いていた。

（何か来る……！あいつの隠し玉かなんかが！）

直後、彼女はその悪寒の原因を発見した。イビルジョーの口から唾液に混じって黒煙とも稲妻とも言える黒い物体が漏れていた。

「！待っ……！！」

青年に警告をしようとしたが、青年の名前を知らないことを今になって思い出し、出るはずだった声が喉に詰まる。その間に青年はイビルジョーへと斬りかかっていた。

「ん？何か言ったか、あいつ？」

少女が自分に声を掛けてきたような気がしたので、一瞬注意がそちらに行ってしまう。いや、普段ならばそんなことはないのだが、今回は心のどこかで余裕ができてしまったようだ。その余裕が、この世界では命取りとなるだ。

バチバチ、電気が反発し合うような音が聞こえ、慌てて振り返る。いつの間にかイビルジョーはゼノから少し距離を置き、首を大きく持ち上げていた。

その口から、唾液の混じった黒い閃光を発生させながら……

（……やっばい……！）

バックステップで回避できる距離ではなく、かと言って武器を収めて逃げる時間もない。

咆哮と共に閃光が放たれる。大地を、倒れた大木を粉々に吹き飛ばす。すべてを飲み込むかのような、闇そのものが、ゼノに迫る。避けられない。だからこそ彼は慌てなかった。これは隙を与えた自分の責任だ。この世界に入ってからまだ浅いにしても、初心者よりは明らかに上位だった。先輩だった。にも拘わらず、初歩的なミス。絶対にやってはいけない大きなミスだった。

直撃まで、コンマ数秒と言ったところ。目の前が真っ黒になり、全身に激痛が走る。はずだった。

ゼノの身体が、ぐい、と引つ張られ、地面に倒れる。閃光はギリギリのところまで当たらなかった。

「…ふう」

溜息を吐くと、不意に兜の上から頭を叩かれた。地味に貫通して痛く、上半身を起こしながら振り返ると、そこには少女が立っていた。

「ふう…じゃないわ、馬鹿」

「助けられたみたいだな、ありがとう」

「……借りは返したわよ」

起き上がり、今一度武器を構え直す。

「…にしても後一步遅かったらやばかった。ホントに」

独り言のように呟く。少女の耳に届いたのか呆れたように、しかしどこか笑いを含んだ表情で溜息を吐く。

「観察眼には自信がありますんでね…」

「迅竜の時から思ってたけど、お前すげえな」

そう言つと、彼女は何故か驚いた様子で顔を赤らめていた。そんなに変なこと言っただろうか？率直な感想を述べただけなのだが。

「なあ」

「んななに！？」

今度は逆にこつちが、先程の少女の表情になる。ゼノは続ける。

「あいつを倒すの俺一人じゃ無理そうだわ、ここは強力しないか？おまえと俺で」

それを聞いて少女は弓を構え、即座に矢を放つ。一瞬ゼノ自身が射抜かれるのかと思っただが、直後に聞こえた悲鳴でそれは違うと解る。矢は見事にイビルジョーの左目を貫いていた。

「おまえ、じゃなくて…」

少女は言う。

「私にはミヤビ〃カミヤザキって名前があるのよ」

「俺にだって馬鹿じゃなくて、ゼノイド〃スペイディオって名前がある。普段はゼノって呼ばれてるけどな」

そうかそうか、と互いに小さく頷き合う。

互いの武器を構え、互いに同じ敵を見る。

「いくぜ、ミヤビ！」

「へましないでよ、ゼノ！」

イビルジョーが今一度黒き閃光を放つ。自分の足元に向かって。地面が大きく碎けて足場が不安定になる。その隙を見計らってか、近づいてきたゼノを踏み潰さんとイビルジョーが足を振り上げる。だがその足を踏み下ろす前にミヤビが矢を放つ。左目が潰された分、死角となり、先程より行動しやすい。

「おおおおおおお！！」

叩きつけられる足に対し、刃を大きく振り上げる。その刃が、丸太のように太い、足の中指を切断した。

ゴオアアアアアアアアアア

あまりの激痛に、イビルジョーが口を多く開き、唾液を撒き散らしながら仰け反る。

「お腹減ってるんでしょ？これあげるわ」

大きく開いた口に向かって、矢の雨が降る。慌てて口を閉じるが、傷つき、脆くなった頭部にはダメージがでかい。

尻尾で岩石を飛ばし、ミヤビを先に片付けようとするが、左側が死角になっており、思いのまま体力が削られていく。

足元ではゼノが何度も腹を切りつけてくるが、こちらに注意を向けると矢の雨が飛んでくる。

絶妙なコンビネーションだった。

今なら、師が何故自分一人で狩りに行かせたのか、解る。

あの人と出会ってからずっとあの人と行動を共にしていた。そのため他の仲間と連むことがなかった。このテストの目的はゼノ自身の力を試すものではなく、新たな仲間を探すことではないのだろうか。この時代を、変えるという同じ志を持った仲間が。

「これで…最後だ！！」

刃がイビルジョーの身体を一刀両断し、矢がその巨体を貫いた。そして、ついにその巨体が地に崩れ落ちた。

「さてと…どうしたものかね」

彼らが立っているのは集落…であった場所。大タル爆弾によって吹き飛ばされたそこはもはや集落と呼べない状態になっていた。

「なんということニヤ…」

「……僕らの集落が…」

「誰の所為ニヤ!？」

「「お前らだよ」」

ミヤビと声を揃えてツツコミを入れる。

集落を守ることはできなかったが、彼らアイルー自身は無事だったことに安堵した。

ゼノはミヤビの方を振り向く。朝日に照らされた彼女の顔は、どこか魅力的だった。

「なあ…」

「なに?…私もあんたに相談したいことがあったんだけど、先にどうぞ」

そう言って彼女は笑顔で催促する。

(どうせ何言おうとしてるか解ってるくせに…)

ゼノも自然と笑顔になる。ならざるを得ない。久しぶりだった。師以外との狩りなど、それもこれほど連携が取れる人間など。だから楽しかった。だからこそ欲しかった。彼女がここにいた理由は詳しくは知らないが、自分達と似たような考えを、彼女は持っている。

「うちにガンナーが欲しいんだけどさあ」

「奇遇ね、家がなくて困ってるのよ」

ゼノは手を差し伸べる。ミヤビも合わせて手を差し出す。二人は

笑う。

「よろしく頼むよ、ミヤビ」

「こちらこそ、ゼノ」

二人は堅く握手をした。アイルー達もにやあにやあと騒ぐ。彼らもうちのコックとして雇うとしようか。戦闘は今回のでやらせない方がいいというのが十分理解できたので。

まずは師のところへ帰ろう。そして報告をしなければ。

新たな仲間が加わったと。

共歩同氏（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます！
次回からまた新しい章に入りますので、今後ともよろしく願います！

ばちばちキャラの紹介もしてかなきゃですねw

永久凍結（前書き）

第2章的なものです。どうぞ楽しんでいただきたいと思います。><

永久凍結

小さな影は、白銀の世界に小さな軌跡を描きながら、村の中心部を今にも転んでしまいそうに走る。その手には大きな熊のぬいぐるみが抱えられていた。

白銀の世界に溶け込むかのような小さな影の正体は、一人の少女だった。まだ成人にも満たない、10歳くらいの幼い少女。

行く人行く人に今日も元気そうだねー、とか気を付けてねー、など言われ、少女もそれに笑顔で応じる。

見知らぬ人がこの少女を見たらまずは驚くのだが、村の人達はそんなこと一切気にしない。

なぜ、驚くのか。それは少女の容姿にあった。

その細く、柔らかそうな肌も、肩くらいまでの癖のある髪も、真っ白なのだ。今は防寒具を着ているので解りづらいが、走る勢いで飛ばされたフードの下から現れた姿は、この地同様、むしろそれよりも白いのではないか。

ただ、少女のその瞳だけは、赤い宝石のように輝いていた。

赤い瞳に、白い身体。生まれつき、身体の色素が抜けてこういった見た目になることが生物学上、あるらしい。別名、少女のような者をアルビノ種という。

「パパー、ママーただいまー！」

村の中心部から少し、北東へ進んだところに、少女の家はある。走った勢いでそのまま大胆に扉を開け、両親に帰りを告げる。

「おかえり、アルティナ。あら、それは？」

帰ってきた少女を迎える母親。アルティナと呼ばれた少女は母親の質問に対して満面の笑顔で答える。

「工房のおじさんがくれたの！なんでもモンスターの素材が余ったから、私のためにわざわざ作ってくれたんだって」

「そう、良かったわね」

そう言つて、娘の頭を撫でてやる。自分と違つた白い髪を。

「ねえねえ、パパは？」

「もうすぐ帰ってくるんじゃないかしら？今日はあなたを驚かせた
いつて、張り切つてたわよ？」

その言葉を聞いて、少女は目を輝かせる。

「ほんとっ！？たのしみー！！」

抱いていたぬいぐるみをより一層抱きしめる。

「じゃ、パパが帰ってくるまで、おとなしく待つてましようね」

「はい」

アルティナは、母親と共に居間へと足を運ぶ。奥の台所からは、お
いしそうな匂いが漂っていた。

ここは年中、氷の世界に閉ざされている。まるで時間が止まつてし
まつたかのようだ。

そこに、一人の男が足を踏み入れていた。ずっしりとした黒い鎧を
身に纏い、白髪の混ざつた茶髪を後ろに撫でつけた大男。

ガドス「ガルハートは、白銀の世界を見渡す。永久凍土の世界を。
(もし、手紙の内容が本当ならば…あの子は生きている)

ポーチに入つたばろくなつた手紙を取り出す。

数日前

ガドスの元へ、一通の手紙が届いた。名宛人は、とある凍土の村に
住む友人からだった。

「こ…これは！！」

驚愕した。それもそのはず、その友人は3年前に亡くなっているの
だ。

手紙の内容はこうだ。ただ一つだけ、こう書かれていたのだ。

娘を た の ム

見てみると端っこの方が赤黒く染まっていた。血だろう。だが解ら

ないことが一つだけあった。何故今更こんなものが？いくらなんでも時間が立ち過ぎている。友人がなくなった時、自分もすぐさま現場へ駆けつけたが、すでにギルドによって管理されていたため、村の中を見ることができなかったのだ。

だから激しく後悔したことを覚えている。なぜ、気付いてやれなかったのか。友人はその時、狩りに出てはいなかったものの、村自体をモンスターに襲われたらしい。村には、友人以外ハンターが何人かいたようだが、どれも内柔外剛の連中だったようだ。友人は一人で、戦い、無念にも村を守れず、死んだ。自分がそこに行っていれば、運命は変わっていたかもしれないのに。

しかし、今こうして自分の元へメッセージが届いている。どういった流れでここへ来たのか解らないが、やることは一つだ。

（もう一度、あの地へ向かおう）

明日にでも行こうか。なるべく一人で行きたいから弟子には、テストとも言つて、他の依頼をやらせておくでしょう。

そしてガドスは今、この地にやってきた。弟子もしっかりやっているか心配だった。正直一人では荷が重い相手だからだ。しかし、彼なら大丈夫だろう。彼は、ハンターにとって自分にはない重要なものを持っているし、何より自慢の弟子だ。

そう心に言い聞かせ、ガドスは進む。地図を見た限りではここより北へまっすぐ向かえば、あの村があるはずだ。友人が大好きだと、話していたあの村が…。

（途中で厄介事に巻き込まれなければいいが…）

今はモンスターにも他のグループのハンターにも出会いたくない。工房の発達の関係で、依頼が重なることが多いので、別のハンターと合うことが多いのだ。そうなるとどちらかがリタイアしたりしなければならないと、非常に面倒なのだ。

何が起こったのだろうか。

目の前には散乱した、家具や料理。そして動かぬ母親。倒れている身体の下からは、どろりとした赤い液体。

何が起こったのだろうか。

確かわたしは、いつものようにパパの帰りを待っていた。パパが驚かせてくれるって言ったみたいだから楽しみにしてたのに…。

何が起こったのだろうか。

ふと見てみると、家の外で何か大きいのが暴れている。尻尾が長く、青っぽくて、棘棘した奴が暴れている。その隣にいるのは…

「パ…パ……」

震える身体を無理やり起こして、見る。やはりパパだ。間違いない。だがその表情は苦しそうだった。わたしにはうまく理解できなかった。これがパパの言う、驚かせてくれるってやつなのか？もう十分驚いたし、もういいよ。もういい。

「もう…ヤメヨ？」

ガタガタ、と足が震える。身体も震える。頬に何か流れる。触ると濡れていた。わたしは泣いているのだろうか？なんで？怖いから？それとも…

ガチャン、と何かが落ちる。それに合わせてわたしの身体も飛び跳ねる。恐る恐る振り返ると、どうやら食器棚から皿が落ちたようだ。皿は落ちた衝撃で粉々に砕けてしまっている。

その時、背後から強い視線を感じた。同時にわたしの名前を呼ぶ声が聞こえた。

「…え？」

振り返り際、最後に見たのは武器を捨て、わたしに手を伸ばすパパと、狐のようなトカゲのような大きなモンスター。そこでわたしの意識は途切れた。なぜなら直後に左半身に強い衝撃と激痛が走ったからだ。

重たい身体を、ベットから起き上がらせる。固まった身体を解すために両手を挙げ、背筋を伸ばす。

「…またか」

そう言つて額に手を当てながら、ベットから降りる。ベットには何年も前から洗つてないのか、所々毛布が破け、黒い染みができていた。左上半身が痛む。あの日以来、同じ夢を何度も見る。何故かは解らない。そしてあの夢を見ると決まつて左上半身が痛む。

洗面所に行き、隅が曇つた鏡で自分の小さな姿を見る。肩下まで伸びた癖のある白い髪、血のように真っ赤に輝く二つの瞳。そして、傷ついた白い肌。その姿は痛々しいと言ふのにふさわしい。

ポリポリと、傷ついていない方の頬を指で掻く。もう片方は傷が酷い為、伸びた前髪で隠してある。口元に笑みが浮かぶ。今更自分のことを痛々しいなど言つても笑えてくるだけだ。

だがこの笑みはすぐに消えた。気配を感じたからだ。

「…ギルドの人？それとも迷子さん？」

どちらにせよ、と少女は続ける。

「ここはわたしの家だ。土足で踏みにジルナ」

そう言つて、壁に立てかけてあるモノを掴み、肩に乗つけるように振りかぶる。

それは、自分の身長の数倍以上ある大きさで、数十倍もの重さのある巨大なハンマーだった。

「ここか…」

ガドスは村の入り口まで来ていた。正確には村だった場所か。今は見るも無残な廃墟と化している。およそ3年前までは、活気あふれていた村だったというのに。

とにかく、こんな場所で感傷に浸っていても仕方がない。探さなければ、友人の大切な娘を。

と思いつつも、ガドスは勿論、その娘のことは知っていた。見た目からして忘れるはずもない。

（どこに…いるのだ）

村の高台から、少女は男見降ろしていた。肩に、巨大なハンマーを担ぎながら。

（…？あの人どこかであつたかしら？）

少女は首を傾げる。男には何か見覚えがあつた。父親と一緒にいたことが多かったような気がしたが…

（まあ、いいや。どうでも…イイ）

少女は飛んだ。自分の身体の何倍もあるハンマーを振り上げながら。村へ入ってきた奴は、モンスターだろうがハンターだろうが潰す。どうせ今のハンターなんて怖くなったら逃げだすような外見だけのカスだけだ。ここで死んだって、別にいいだろう。

「…っ!？」

不意に殺気を感じて、後ろに飛び退く。直後目の前が爆発した。正確には地面が、だ。

巨大な水柱のように、雪が舞う。まるで白いカーテンのようだ。そして、そのカーテンが晴れた時、そこには一人の少女がいた。

無造作に伸びた白い髪の間から除く、殺気だった赤い瞳。その巨大なハンマーを支えるには明らかに不釣り合いな小柄な身体。小さな口からは、白い吐息を漏らしている。その姿はまるで獣のようだ。しかしガドスは少女に見覚えがあつた。そう、この地でこんな姿の人間、一人しかいない。

「…アルティナ」

ガドスは少女の名を呼んだ。

アルティナと呼ばれた少女は、それに対し表情を変えない。

約3年振りに、二人の人間が出会った。それは互いにとって幸か不幸か

制限時間（前書き）

明日からこちらの予定の関係で、少し間が空いてしまうので本日は
2話投稿です。；

制限時間

「…どこかでお会いしましたかしら？」

相変わらず、無表情のままアルティナは目の前にいる、槍を背負った大男に質問をする。

「そういうお前はオレのことを覚えているようだ？」

そのセリフに、アルティナは身体をピクリ、と震わせる。同時に目を細める。

（予想通り、パパの友人ね…でも）

「今更何をしに来たか？ だろ」

今度はハンマーの柄を握る手に力が入る。何もかも見透かされているような気がしてならない。だがとりあえずはその通りだ。他に返しようがない。

男は一枚の紙を取り出す。手紙ようだ。それをアルティナの前に差し出す。

「オレはガドスⅡガルハート。お前の父から頼まれごとがあつてやつてきた。」

「…頼まれごと？」

手紙の内容に目を通す。その内容は確かに父の字で書かれていた。

「お前のことを頼まれたのだ。アルティナⅡ克蘭ブルス」

アルティナはそれを聞くと、地面からハンマーを上げ、再び肩へ担ぐ。そしてそれをそのまま一度振り下ろした。

再び地面が爆発する。それが治まった時、そこにアルティナの姿はなかった。

「…！どこへ！？」

まだ話は終わっていないというのに、少女は自分の前から姿を消してしまった。

ちっ、舌打ちをし、少女を追う。どこへ行ったのか解らないが、あ

れだけの重量の武器を軽々振り回せるようになっていとなると油断できない。生きていたことはうれしい限りだが、やはり時間が立ち過ぎている。昔は人懐っこく、明るい子だったが、今ではあの状態だ。恐らく長年この地を離れられず、孤独にしていたから、心の方がおかしくなっているのだろう。あれでは、非常に危険だ。

（いくら腕が立つようになっていたにしてもまだ成人に満たない少女、あの状態では何らかの弾みですぐ壊れてしまう……！）

それが精神面の話か、肉体面の話か、あるいは両方か。何にせよ、頼まれた以上、そして生きていた以上、彼女をこれ以上一人にはしたくなかった。

どうやら村の中にはいないようだ。建物などの中はしっかり見てはいないが、あの武器を持ちながら家へ入ると衝撃で相手に知らせてしまう可能性が高いと見た。

この村自体はそんなに広くはない。村を出たにしてもそんなに遠くにはいないはずだ。

一度村を出て、凍土に出てみるか。そう考えている時だった。

ギアアギア、と鬱陶しい声が聞こえる。見るとそこには青い身体をした人間の大人くらいの大きさのモンスター、バギイがいた。

それも一体ではない。5…10…もつとだろうか。気付かぬうちに囲まれてしまったようだ。

（こんな時になあ……）

溜息が出てしまう。面倒事に巻き込まれないで欲しいって時に限って、巻き込まれるのはもはや常識なのか。

奥からそのバギイ達よりも二回り以上でかい個体が現れた。群れのリーダー、ドスバギイだ。

やれやれ、と背中から槍を持ち、構える。鎧同様、盾も刀身も漆黒の槍だった。

「あまり無駄な狩りはしたくないのだが……」

ドスバギイが咆哮し、子分達に命令を下す。すると、バギイ達が一斉にガドスの元へ殺到して言った。

「急ぎだ。5分で終わらずぞ」

「ハア…ハア…」

アルティナは走っていた。肩に巨大なハンマーを担ぎながら。どうやらあの人物はここまで追ってこないようだ。アルティナはその場で足を止めると、ハンマーを地面に置いて、左肩を掴む。夢を見たわけでもないのに左半身が痛む。今は鎧を着ている所為でブヨブヨした感覚しか伝わってこないが、実際電流が走っているかのように痛い。

そういえばこの防具はなんだっただろうか。襲われ、廃墟と化した工房に置いてあったのを勝手に使ってしまったているが、そこは良しとして。他のものもいくつかあったのだが、見た目としては、怪獣のぬいぐるみのような感じで、何よりこのブヨブヨした感触が好きなので使っている。

（パパは…わたしがハンターになることを反対してたっけ）

不意に、そんなことを思い出す。ハンターの真似ごとをしただけで怒られたこともあるから相当なものだろう。今みたいに、ハンターの装備をしているのを見られたらどんな顔をするだろうか。

（あれ…？まてよ…？）

そもそもどんな顔をしてたっけ？思い出せない。何故だろう。夢に出てくる顔も思い出せない。

（パパの力オ…ママの…力オ…？）

あーでもない、こうでもない、と呟きながら、アルティナは頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。

（まアいい…ドウデモイイ）

とにかくだ。今はわたしをここから連れ出そうとしている奴がいる。パパの字で手紙書くななんて器用なものだ。だいたい来るにしてもいくらなんでも遅すぎる。あれから…年も経っているというのに、立ち上がり、フウ、と深呼吸をする。白い息があたりに広がり、消えていく。

「今日は何か変ね、わたし…こういうときは」

そう言つて、地面に置いたハンマーの柄を掴む。そして持ちあげる勢いを利用し、大きく振り上げ、肩に乗せる。

「全部：ブツ壊セバインダヨ」

少女の精神が…壊れ始めていた。

飛び掛かってくる一体のバギイの胸に、槍を突き刺す。すると突き刺した傷口から、火が起き、あっという間にバギイを火ダルマに変えていた。

「ぬうん!!」

ガドスは火ダルマと化したバギイを刺した槍をそのまま横へ薙ぎ払い、他のバギイを巻き込む。ハンター使う武器には、属性効果の混ざったものがある。これは武器にもよるが、主に敵にダメージを与える、その敵の脂などに反応し、発火したり、凍傷を起こしたりすることができる。

凍土を根城とするバギイ達、というよりも寒い地方に生息するモンスターは基本的に氷に強く、火に弱い。だからあらかじめガドスは火属性の武器を担いでいたのだ。

民家に当たらないよう、あちこちに火ダルマを投げていく。

ゴガアア！

今度は左右、そして背後から同時に三体襲いかかってきた。そのうちの一体は口から透明な粘液をガドスに向かって吐きだす。

ガドスは近くにいた。一体の頭を、槍を持ってない右素手で掴み、そのまま盾にする。すると粘液に当てられたバギイはその場で倒れ、寝息を立てた。バギイ達が吐きだす粘液には相手を昏睡させる働きがあるのだ。もっとも、その必殺技は味方に当たってしまったわけだが。

そうして相手が怯んでいる間に、槍を横へ一閃し、他の二体の胸を切り裂く。

炭化した死骸や、内臓、血が白銀の世界を染める。そして

「あとはお前だけだ。」

そこに佇む強力な個体、ドスバギイに槍の先端を向ける。

グルアアアアアアアアア！！

子分達をやられたドスバギイは、その発達した跳躍力を利用し、ガドスに飛び掛かってくる。

ガドスはこれを盾で受け流し、すぐさまカウンターの一撃を加える。槍はドスバギイの背中を掠め、発生した火が奴に生える黒毛を焼いた。

ドスバギイは怒り狂ったように唸り、喉の奥を鳴らす。何をしてくるつもりか、ガドスには解っていた。

盾をただ真っ直ぐに突き出す。予想通り、ドスバギイは口を大きく開き、透明な粘液を吐きだしてきた。盾に当たり、粘液が爆散する。

「どけ」

どうしたらいいか解らない、と言った様子で慌てふためいているドスバギイの頭部を、盾の上から殴り飛ばした。

ビシイ、と頭部に発達した弧を描いた鶏冠にヒビが入る。強烈な一撃に脳震盪を起こしたのか、フラフラしているドスバギイの細い首を、漆黒の槍が貫いた。

そのまま槍を引き抜き、痙攣しているドスバギイの身体を蹴り飛ばす。

「大分、時間を掛けてしまった」

あたりを見回すと、バギイ達の死体以外は見当たらない。勿論、人間の気配も感じない。

だからと言って、突っ立ても仕方がない。だからガドスは走った。再び、少女を捜すために。滞在時間は残されているが、こちらの時間はあまり残されていない。

アルティナは自分の背後に、強烈な殺気を感じた。

そしてその殺気には覚えがあった。あの日、村を襲った奴と同じ

奴。左半身が痛む。アルティナは今になって気付いた。何故こんなにも身体が痛むのか。

振り返る。そこには狐のような、トカゲのような一体の大型モンスター。

近くにこいつがいたからだ。この傷を負わせた犯人がここにいるからだ。

「フフ…ハハハ」

足が震える、身体が震える。しかし、それはあの時のような恐怖だとかそんなマイナスなものではなかった。言いたとえるなら狂喜。

「…久しぶりだね…年振り？」

モンスターが、凍土全体を揺るがすような咆哮を上げる。アルティナの目には不思議とモンスター自身も喜んでいるように見えた。

この地に入り込んだ獲物に対してか、それとも

剛撃氷狐（前書き）

少し長めです

剛撃氷狐

辺りは、そいつの冷気を含んだ吐息で、白く霞んでいた。

一本一本が氷柱のような長く鋭い、ずらりと並んだ白い牙。

獣の様な四肢を持ち、それらは鉄色の鱗でびっしりと覆われている。

長い独特な形をした角、背に生える棘や、退化しかけ、翼と言うよりは腕と言った方がいい前脚にある鋭利な爪。それらはすべて、キレイな琥珀色をしていた。

何よりも特徴的なのは、その長く、緩やかに撓る、先端が団栗状の形をし、細く大きめな鱗に包まれた尻尾。

凍てつく冷気を操るそいつの名は、氷狐竜デュラガウア。

かつては凍土ではなく、辺境の古塔に住みついていたと聞いているが、最近は人間から逃げるように住処を変えるモンスターがいるようだ。こいつがここにいるのもそのためだろう。

デュラガウアは非常に警戒心が強く、物音にかなり敏感である。

そのため、先程暴れた所為で、気付かれてしまったのだろう。

デュラガウアは両前脚を交互に勢いよく地に打ち付けると、その場で咆哮する。それは戦闘開始の合図だった。

「まさか、そっちから来てくれるなんてね。丁度よかったわ、アナタに関係が深いモノだから、アナタを探していたのヨ」

デュラガウアはその場から動くことなく、ただ姿勢を低くする。

これは攻撃してきた相手を即座に昏倒させる、カウンターの一撃だ。勿論、アルティナはそのことを知るはずもないが…。

辺りが一層霞んできた。まるで少女の心を不安で覆うように。デュラガウアはただ構えを崩さず、不気味に笑う。この状態なら、人間よりも目が良い自分の方が断然有利だと思っていたのだろう。

次の瞬間、地面が爆発し、その衝撃で霞も一気に晴れる。突然の

出来事に、反応が遅れ、身体が固まってしまふ。

辺りに氷塊が雨の如く落下し、地に落ちる度にガラスが割れたような音が、複数起き、もはや一種の大合唱のようになっていた。

音に敏感なデュラガウアにとって、これだけの大音量は堪える。何より、相手を探すのに手間取ってしまうのだ。視覚と聴覚、両方を同時に潰された気分だ。最も、その二つが潰されても、嗅覚というものがあれば十分だった。

デュラガウアは即座に、左半身に力を入れ、一気に突き出す。身体に当たった氷塊が一瞬で粉々に砕け、同時にブヨブヨした何かが当たった。

「残る念　フエイクだよ」

突如、攻撃を入れたとは逆の方向から、声が聞こえる。慌てて振り返ろうとするが、その時には顔面に巨大な鉄の塊が減り込んでいた。

ハンマーを振り抜き、デュラガウアの身体ごと、遠くへ吹き飛ばす。両手がピリピリと震える。少し無理をしただろうか。

「みんなどーいう風に戦ってたのかな」。大型の子と戦うのって、これが初めてなんだよね」

血と霜の付着したハンマーを肩に担ぐ。今のアルティナの姿はと言うと、見事に下着のみである。なのだ、とりあえず脱ぎ捨てた防具を取りに行く。いくら慣れているとはいえ、さすがに寒い。幸い、デュラガウアは今の一撃で昏倒しているようだ。

先程、雨のように降った氷塊が止んだためか、また辺りが白く霞んできた。おかげで同じように白い色をした防具が見つけづらい。そこは自業自得か、と一人納得して、ようやく防具を発見する。

こうやって防具を着ていれば、どこから見てもハンターだ。だが彼女は正規のハンターじゃない。第一ハンターになるには、ギルド公認のカードが必要だし、なによりまだ歳が数年足りていない。つ

まり今彼女がやっているのは、言うならば、ごっこ遊びだ。

「……そもそもなんでこうなったんだっけ？」

防具の調子確かめながら、過去を思い出す。記憶がめちやくちやになっているのを少しは自覚しているのかしてないのか知る由もないが……。

アルティナは振り返る。この力を得たあの日を

目を覚ますとそこは、薄暗い、四方八方をコンクリートで覆われた部屋だった。

次に、その部屋に置いてある、囚人が眠るような雑なベットに寝かされていることに気付いた。

「おや、目が覚めたかい？」

怪しげな低い声、恐らく男のものである声に視線を泳がすと、一人の人物が目の中の、ベットと同じような雑なイスに腰掛けていた。手には、小さなメモ帳のような、薄い本を広げていた。

「……あなたは？」

自分でもわかるような弱々しい声を上げる。身体を起こそうとすると、左半身に強い激痛が走った。

「つ……!!」

「ああ、ダメダメ。まだ寝ていないと。なんてたって全治3年レベルの怪我なんだからね」

声にならない悲鳴を上げ、嫌な汗がどつと噴き出る。荒い息を何度も吐く少女の様子を見て、男は本を閉じると、薄い笑みを浮かべたまま、手で顎を摩る。

「僕は、あれだよ……。お医者さんだ。ギルドの人間に崩壊させられた村の生き残りである君のことを任されてしまったね。いや、全然迷惑じゃないんだよ？」

「お医者……さん。……ねえ、生き残りって？」

その言葉を聞くと、男は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「ん、幼い君には尚更言いづらいことなんだけどね。」

男は、ふう、と大きめな溜息を吐くと、真剣な眼差しを向ける。

「はつきり言ってしまうよ。君以外死んでしまったってことだ。

勿論君の両親も含めてね」

「……？」

何を言ってるのかよく理解できない。否、したくない。

「まあ、受け入れろ……と言つのは難しい話さ。とにかく君はしばらく安静にね。」

落ち着いたら詳しく話してあげるよ、と男は席を立つ。

「……まって」

「ん？なにかな？お嬢さん」

「わたしを……村に戻して」

その言葉を聞くと男は面食らったような顔をし、思わず手に持っていた本を地面に落してしまふ。だが少女の言葉を冗談とも受け切れなかった男は、先ほどよりも真剣に、今度は警告も混ぜた口調で少女に問う。

「本気……で言ってるのだろうか？いいのかい？もはや君の住んでいた村はギルドの管轄からはずされた一種のゴースタウン。すでにモンスターの巣窟となっているだろう。わざわざ命を投げ捨てるものではないと思うが？」

少女は唇を噛み締め、苦痛に耐える。それでも、その瞳が語る決意は変わっていないかった。やがて男は根負けしたのか、呆れたような溜息を吐く。

「やれやれ……まあいいだろう。医者としてこんなこと言っちゃいけないんだけど……」

「……それじゃ」

「但し、先程言った通り、君の怪我は全治3年レベルだ。無理に治すこともできないがそれでも半年はかかるよ。それでもいいかい？」

言わば、これは最終警告。だが、それでも少女の決意は変わらな

かった。

「…うん」

「…解った、そんじゃ薬持ってくるから、もう少し休んでくлетまえ」

そう言つと男は、横たわる少女に背を向け、部屋のドアを開けるとその向こうの闇へ消え去ってしまった。そこで一旦意識は途絶えてしまった。

男は先程よりは明るい（それでもランプの明かりが追加されただけだが）、自室の机にある、様々な素材と睨めっこしていた。

少女の傷を癒す為に、現在薬を調合しているのだが、随分難しい薬なので手間取っている。

「愛されてるね〜親子共々」

調査しながら、男は机の端っこに置かれている手紙に目をやる。

内容は…

「娘を頼む…ね。しかし彼女は君の元へ今すぐにも行きたいみたいだよ」

困ったもんだ、と男は薬の調合と彼女の決意の両方に頭を悩ませていた。

「安心しろ。君の娘はちゃんと僕が責任を持って治してやる。問題はそのあとだが…」

ボリボリ、と手で頭を掻く。その後何か閃いたように下に向けていた顔を上げる。

「そうだ…あいつに任せるか…」

「いやあ〜またせたね」

次の日の朝、男が部屋に入ってきた。手には赤いビンを持っている。

「それが…お薬？」

「そそ！名付け…なくても“いにしえの秘薬”って言うんだけどね

…」

はい、と男に薬を渡される。

「それを飲むと再生能力と栄養循環が著しく向上するからね。傷も早めに治るだろうし、ご飯を食べなくてもなんとかなる」

但し、と男は付け加える。

「君の体はまだ幼い。故にあまり薬に手を出し過ぎると、遅かれ早かれ君の身体に何らかの異常が起こる。それだけは注意してくれたまえ」

それから数ヶ月、少女は苦痛と疲労と戦い続けた。そして約半年後

男の家を勝手に飛び出した。

思いの外、簡単だった。部屋の壁を殴ったら簡単に壊れてしまつて、そこから男の部屋からあらかじめ盗んだ地図を頼りに数日掛かつて、故郷の村へたどり着いた。男の言った通り、村は無残なものだった。

地図の他にもいくつか薬を盗んでおき、その薬の効果もあつてか食欲には困らなかった。薬が切れてからはその辺にいるモンスターを適当に料理して腹を満たしていた。

そして、現在

「いつかまた会ったら謝つところかな…」

そもそもこの村に早く来たかったのは両親の死が受け入れられなかったからである。ようするに現実逃避みたいなものだ。信じることができなかったのである。最も、それはこの村に着いた瞬間にすべて理解してしまったが。

大きめな溜息を吐く。それは後悔の溜息だった。結局のところ、デュラガウアをぶん殴つても特に思い出すことがなかった。

何かあるのである。思い出すというよりも今の自分に足りないも

のがあるのだ。あの男の場所ではそれが一生手に入らないと直感したから早く村に来たかったというのもある。

キーはこの村なのだ。

しかし、勝手に飛び出したのは許されることではない。両親にもそういうのはよく躰けられていた。残念ながらその両親の顔が思い出せない状態なのだが…。

「うん…」

辺りの霞のように、心のモヤモヤが晴れない。以前にも同じようなことは何度もあるが、その時は決まって何か壊していた。理由もなく、ただなんとなく。

突如、背後で物音がした。モゾモゾと何か蠢くような音。

（そういえば忘れてた…コイツまだ生きてるんだった）

振り返るとそこには案の定、デュラガウアの姿があった。先の一撃で牙が数本欠けていたが、他に目立った外傷…を確認する前に前脚を大きく振り上げ、目の前の敵をその鋭い爪で切り裂こうとしていた。

こちらにも攻撃を仕掛けようと、武器を構える。恐らく多少は喰らってしまうだろうが仕方ない。

「って誰かが言ってた気がする」

「お前の親父さんじゃないか？」

不意に目の前に現れた黒い塊がデュラガウアの一撃を弾いた。手には鎧同様、漆黒の槍を持っている。

「そーいえば…アナタもいたっけ」

男と目が合う。自分とは違う、覇気の強い金色の瞳。

「ガドスのおじさん…」

「こいつを甘く見るなよ？そこの連中とは違う。言わば剛種モンスターだ。まさかこんなところでお目にかかれるとは思ってなかったがね」

「剛種？」

そつだ、と男は続ける。

「本来ならば楽に狩れる相手でも、稀にハンター達から生き延びた奴、もしくはそれ同士が交尾して生まれた個体は非常に強力だな。今の現代じゃこいつみたいな剛種と原種の区別がつかなくて逆に狩られる奴が多いんだよ。村が滅んだのは主にそっちが原因だな」

何を言ってるかよく理解できなかったがようするに

「運が悪かった…と？」

「そうだ…教科書通りで勝てるような相手じゃないってことさ。全員が全員、連携が取れるなら話は別だがね」

デュラガウアの身体が白く染まっていく。それに合わせて周りの気温が一気に下がっていく。

「さあて、ガチでやるのは大歓迎なんだが…いけるかねえ」

少女昏睡（前書き）

だいぶ間が空きました、申し訳ないです；
次で2章は終り、本格的になってきます。

少女昏睡

右の前脚を交互に地面へ叩きつけ、猛々しい咆哮を上げる。その音量は、耳を塞いでいても鼓膜を破るのではないかと思わせるほどだ。

咆哮により風圧が起こり、周囲が真っ白に曇る。その中で、アルティナは一人、疑問を感じていた。

（わたしは何故こいつの名前を覚えている？）

今現在、アルティナは両親に対する記憶が曖昧になってきている。にも関わらず、両親と（主に父親）と親しかった人間のことを覚えている。勿論、この男と話していた時の両親の顔は、全く思い出すことができない。

（…まあいいや）

最初自分の村にこの男が入ってきた際、追いつ返すか排除しようかと思っていたが、両親の知り合いならば何か知ってるだろう。目の前の敵を倒してから、じっくりと聞こうか。どうも手伝ってくれるみたいだし…。

視界が晴れてくる。とは言え、まだ完全に晴れたわけではなく、それでも目を凝らさないとつきりしない程度だ。

ガドスはこの状況に全神経を尖らせ、相手の出方を窺う。相手を倒すわけではない。こちらの本来の目的は友人の娘の保護だ。その友人の娘がやる気満々と言うのが最大の悩みの種だが。

（どこであんな力を手に入れたんだか…しかし、あの力はこの状況を打破するのに使えるかもしれない）

とにかく今は逃げるのが先決である。一人はハンターではないし（何故かそれほどの力を持っているが）、実質一人で戦うことになる。

不意に背後で悪寒を感じ、盾を構える。直後、白い巨人のような

手が伸びる。

ガキイ、と金属同士が擦り合うような音と共に腕を伝って全身に強い衝撃が走る。身体に活を入れ、相手を睨む。今ので、曇りが晴れ、相手の姿をはっきりと捉える事が出来た。

吐息だけではなく、身体全体から冷気を発している。

頭部、爪。琥珀色が目立つそれらは今は真っ白に染まっていた。そして、長い特徴的な尾も、同じく真っ白に染まっていた。違うのは、包むように並んでいた鱗がすべて逆立ち、見た目だけでも強烈な棘棍棒になっていた。それを少し左右に振るだけで、空気が凍りつく。

言うならばそれは氷の鎧。

デュラガウア自身が、自ら発する冷気を纏い、より強度を高めることで、主に火力を上げる。

デュラガウアは二足立ちすると、交互に前脚を打ち鳴らす。まるで刃物を研ぎ合わせるように。

ギンギン、と刃物同士がぶつかり合う音を出し、火花を散らせる。デュラガウアの爪が、如何に強力なものか教えられる瞬間である。目の前の人間達を、どのように料理してやろうかとも言つように。

「…基本的に背後に回るように立ち回れ。そうすれば比較的安全だ」

そう言つて、自分の身長のおおの三分の一くらいしかない少女に指示する。

「…守つてはくれないの？」

「勿論守るさ。そこは安心してくれていい」

ふうん、と特に興味もなさげに返事をする。ほんの数年前の活発な姿でなくなってしまったのが心に痛む。できることならもう一度あの頃に戻してやりたい。

「来るぞ！」

そう考えているのも束の間、デュラガウアが獣走りで突進してくる。アルティナは側面に回り込み、狙われたガドスは盾で防ぐ。ずらりと並んだ牙が目の前いっぱいに広がり、その向こうに闇が広がっている。そのままガドスを押しつぶそうとデュラガウアが力を入れる。

「ぐっ……！」

しかし、その直後デュラガウアの身体が少しばかり浮いたかと思うと、目の前にあった牙が視界から見え失せる。瞬間、白銀の大地に強い衝撃が走った。バックステップで一度距離を取り、半場地面に埋まりかけてるデュラガウアを見た後、そうさしたであろう少女に目を向ける。

「……守ってくれるんじゃないの？」

子供のような（子供だが）笑顔でそう言われてしまう。奇しくもあの頃に見せてくれた笑顔で。

「すまんね……。どこでそんな力手に入れたんだ……？」

ちゃんとした礼よりも先に、ずっと気になっていたことを聞いてしまう。それに対し少女は何か考え事をするように唸る。

「んー……お薬？かな。よくわかんないや」

考え事は苦手なのだろうか、結局曖昧な答え方をする。だが、それだけでも十分引っ掛かるものがあつた。

（薬……？まさか）

とある部分へ結びつこうとした瞬間、デュラガウアが両前脚を出鱈目に振り回し、地上へ這い出る。

（つといかんいかん。先にこっちな）

余裕を保てる相手ではないのだが、どうしても余裕ができてしまう。初めての人物と組む時はそんなことはないのだが、少女と顔見知りだろうか。一旦少女から目を離し、デュラガウアの方を見る。

デュラガウアは首を大きく持ち上げる。その際、喉の奥から何か

上がってくるのが見えた。

「側面か背後に回れ！！」

直後、口から放たれた冷気が五つほどに分かれて、氷の道を作っていく。ガドスは放たれる前に側面へ周り回避。少女も従ってくれたようだ。少女はそのまま仕掛けようと、デュラガウアに突撃するが…

「！？…離れる！！」

男が向こうで何か言ってるがよく聞き取れない。とりあえず二、三発入れようとデュラガウアに突っ込むが、突如その姿が視界から消え失せた。

地面に影が残っているの、上に跳んだか、と理解した時にはデユラガウアが空中で一回転して地上へ降りてくる。その直後、地鳴りと共に視界が青い煙で覆われた。

「…う？」

それを吸った瞬間、急激に眠気に襲われ、アルティナの意識はそこで途絶えてしまった。

「ちい！！」

ガドスは舌打ちするとすぐさま少女の元へ向かう。強力な冷気もそうだが、もう一つの方を警戒するのをすっかり忘れていた。

氷狐竜デユラガウアは、体内に睡眠袋を持っており、そこから生成される特殊なガスは、対象をその場で昏睡させることができる。そのため少女は今眠っているだけだと言うことは解ってはいるが…勿論、デユラガウアがそれだけで攻撃を止めるはずもなく、その白い巨人のような前脚を振り上げ、小さい身体を潰さんとする。

その間にガドスが割り込み、盾を構える。同時に前脚が振り下ろされる。

ズドォ！とすさまじい音と共に、地面が爆発する。しかし、少女の身体は潰されていなかった。

「…やらせんよお……！」

あまりの衝撃に、盾を構える腕が震え、額に脂汗が滲む。今は、振り下ろされることなく、盾で防いでいるが正直時間の問題だ。丁度眠っているから、そのまま抱き上げてとんずらしたいところだが、警戒心の強いデュラガウアが見逃してくれるはずもない。

（…ほんと、どうしたものか）

いくら私事とは言え、今度ばかり弟子を連れてこなかったことを後悔する。そう考えているうちに、本格的に耐えられなくなってきた。

（せめて彼女だけでも…！）

その直後、身体が急に楽になった。見るとデュラガウアの方が痙攣している。この痙攣の仕方は見覚えがあった。麻痺している。

「そこの人？大丈夫か？」

背後から、若い男のものと思われる声がした。

振り返ると、背中に折りたたみ式のヘビィボウガンを担いだ。いろいろな種類の防具を装備した青年だった。青年はそのまま右手を上げると何時の間にかいたのだろうか、他三人の、同じようにいろいろな種類の防具を装備したガンナーが一斉に弾を発射した。

ガドスはそれを見て、彼らが正式にデュラガウアの駆逐、もしくは素材集めを依頼されたハンターだと理解した。

「すまない、助かった」

「おじさんは依頼を受けてここへ？」

「ああ、狙いはあいつじゃないかな」

それを聞くと青年はそうですか、と安心したように頷く。その間にデュラガウアの麻痺が取れて、再度機能しようとしていた。

「お？はやいなあ。さすが剛種か」

そう言いながら、青年がポーチから閃光玉を取り出し、投げつける。視界が凍土よりも白く塗りつぶされ、デュラガウアが悲鳴を上げる。

げる。

「それならさっさと逃げちゃってください。正直邪魔なんで」

「ああ、健闘を祈るよ」

ガドスは眠っている少女を抱き上げると、そのまま青年達に背を向け、走り出す。見た感じ連中、特にリーダー格の青年は正式な依頼を受けてきた効率狩りのプロだろう。他のパーティーメンバーが下手をしなければ剛種とは言え、負けることはないはずだ。

ハンター同士、もし依頼が被ってしまうと後々面倒なことになってしまう。と言っても責任を負うのはハンターではなく、依頼を管理しているギルドだが。勿論、ガドスも別の依頼を受けた形でここに来ている。素材採取と言う名の依頼を受けてた。

少しばかり距離のある、林に囲まれたベースキャンプに辿りついた。先程彼らが来たおかげか、まだ竜車が残っていた。竜車の上でのんびりしている猫に話しかける。

「すまない。素材採取でこちらに来ていたものだがこれを」

そう言ってここに来た際、あらかじめ所持しておいたネコタケチケットを猫、アイルーに渡す。これがないと帰ることができない。

「お疲れ様ですニャ。そのまま街へ帰りますかニャ？」

眠っている少女を竜車の中で横にしながら、アイルーの質問に答える。

「いや、寄りたいところがあるからそこで降ろしてくれ」

「どこですかニャ？」

少女を寝かせると、自身も兜を脱いで竜車の壁に寄りかかる。そうして少しばかり溜息混じりで答える。

「なに、知人の医師のところだ」

帰ル場所（前書き）

これで2章は終わりです。

帰ル場所

一方その頃、某所では

辺り一面が森に囲まれた、しかしながら人が通る道がはっきりとしている場所。本来ならば竜車が通る道であり、今も勿論、一頭のアプトノスが竜車を引いて二人の人間および三匹の猫とある場所へと運んでいた。

「で、これはどこに向かっているの？」

竜車の中で、座り込んで武器の手入れをしながら一人の少女が、近くで手を後ろに組んで寄り掛かっている青年に問う。目を閉じていた青年は方目を開き、若干呆れ気味の顔を浮かべる。

「どこって…ギルドだよ？」

何当たり前のこと聞いてるんだ？と言うように青年は再び目を閉じる。少女はそれに対し、目を横に逸らして一人ぶつぶつと何か呟いている。

「ギルド…やっぱりあれかなあ………ダイジョブだよね…」

「何念仏唱えてんの？」

「違う！ちよつと気になることがあっただけよ…」

それを聞くと青年は何か思い出したように、ああ、と声を漏らすと同時に預けていた身体を起こす。

「言い忘れてたけど、ギルドつっても街にある奴じゃないぜ？何ていうか師曰く、“裏ギルド”っていうらしい」

「“裏ギルド”？」

青年は固まった身体を解すように筋肉を伸ばしたり捻ったりする。時節、背骨や肩の骨がポキポキと軽い音を鳴らす。

「通常の依頼を扱ってない場所だな。俺みたいに危険な討伐依頼を受けるか、本部から送られてきた対象の調査が主な仕事かな？」

報酬高いぞ、と青年は本日の狩りのこともあってか、報酬の期待に目を輝かせていた。だが、少女の抱く不安はそこではなく、と

りあえず遠まわしにいろいろ聞いてみることにした。

「まあ、あれよ。そこはどういう人達がいるわけ？」

それを聞くと青年の表情が少し曇る。何か不味いことを聞いたかと慌てて訂正しようとするが青年の方が片手を突き出してそれを制す。青年は深呼吸して真顔になる。

「今工房の発展が目覚ましいだろ？まず素材の要求量が半端じゃない。おかげで素早い効率的な狩りが主流となってきた。だがその中でも敢えて正々堂々って言ったらいいのかな？ソロで活動している奴とか、パーティ組んでもモンスターハメたりしないとか」

あれだこうだ、と説明にだいぶ苦労しているようだ。だが何が言いたいのかは少女に深く伝わった。ようするに、

「効率狩りの枠から外れた、もしくは外された人達……」

「ん、まあそんな感じ？結局は狩った者勝ちなんだけだよ。達成感を求めるっていうか、もつと楽しみたいって連中が多いぜ」

俺らみたいにな、と青年はにこやかに笑う。

（……つまり、私と似たような人達か）

勝手にそういう風に解釈してしまったが、強ち間違いではないだろう。青年の言葉を聞いて一先ず安心した。だが不安はそれだけではない。もつとハンターにとって基本的な法のことだ。

「そついやお前、正式な依頼受けてあの樹海にいた？」

「え……………」

あの樹海を出てから今に至って、最も気にしていた部分を突かれた。故郷の村から夜逃げし、辿りついた樹海の集落。その集落を守る為という理由でモンスターを狩ったりしていたのだが……

「……ミヤビさん？」

「し、仕方ないっていうか……！その、ねえ？」

額に汗を浮かべながら強張った笑顔で青年に助けを求める。

「……まあ理由はともかく、狩ってきたモンスターがもしギルドの依頼リストに入ってるのであれば、ちよいと罰せられるんじゃない？」

「……だよな」

「新しいモンスターが発見されたのでギルドと共に調査してきて下さい、とか」

それを聞いて少女 ミヤビ眉間に皺を寄せ、頭に疑問符を浮かべる。

「え？捕まったりしないの？」

「しないよ？だってお前の奴は密猟扱いになつたとしても、取引してるわけじゃないだろ？」

首を縦に振る。勿論、そんなことはするはずがないし、する必要がなかった。

「まあ、向こうに着けば解るって」

青年はそう言つて、自分の武器を弄つた。漆黒の鞘から僅かに覗く刀身は白銀に輝いていた。

ミヤビは巨大な箱に車輪の付いたような竜車から軽く身を乗り出し外の様子を見る。丁度真上に來た太陽が眩しい日差しを放っている。隣では集落でお世話になつた三匹三色のアイルー達が互いに身を寄せ合つて丸くなっている。水色、黄色、桜色……

ぐうぐう、と自分とは逆の方向からそんな音が聞こえる。見ると青年が脱力感最高潮な顔で空腹を訴えていた。

「何、ゼノくん？」

「……お腹が空きました……」

言われてみればそうだろうか、時刻は丁度お昼時だろう。

「まあ、そろそろそんな時間よね。はいこれ」

そういつて一瞬目を輝かせた青年 ゼノが、渡された携帯食料を見て絶望する顔を見て笑うのだった。因みに、携帯食料は水がないととてもじゃないが口の中がパサパサして気持ち悪くなる。しかし、この時水を持っていたのはミヤビだけだった……。

目を覚ますとそこは、薄暗い、四方八方をコンクリートで覆われた部屋だった。

次に、その部屋に置いてある、囚人が眠るような雑なベットに寝かされていることに気付いた。

その場所、その状態にデジャブを感じる自分がいる。ここは、自分の知っている場所だ。

随分と長く寝かされていたような気がする。氷狐竜だかに、変なガスを吐かれてから意識がない間、自分はどうなっていたのか。気になることばかりではあるが、身体を起こそうにも思うように動かない。

「…本当か？」

不意に、自分の耳に別の声が聞こえてきた。横になったまま、首だけを動かして声のする方を見る。それは、扉の向こうから聞こえてきていた。

「ここで僕が嘘を吐いて、何のメリットがある？」

「…そうだな……しかし妙だ」

「そこはギルドとかで確認を取ってみればいいだろう、それより……聞こえてくるのは、自分を連れ戻しに来たとか言う、両親の友人と、何時だかお世話になった医者の声。そう、ここはあの医者の住処だ。ようやく思い出したところで、何かできるわけでもないの（恐らくあの医者が動けなくしているに違いない）、しばらく二人の会話を聞くことにした。

「彼女の記憶障害についてだ。これがまさに妙なことでね？」

「記憶障害……と言うと？」

「自分の中で最も大切であろう部分の記憶がすっぱり抜けている状態なんだ。これは憶測だが……彼女はここへ連れて来られた時、すぐにでも村へ戻りたがっていた。普通に怪我が治ってからなら、勿論こんなことにはならなかったが。」

ここで少し会話が途切れる。医者の方が喉でも潤しているのだろうか。

「普通ではなかったんだな？あの馬鹿力と関係があるのか？」

「ああ、彼女はここに住んでいる間、両親の元へ行けないことに過

剰なストレスが堪っていた。それをなくそうと自ら僕の研究室にこっそり入り、あるうことが鬼人薬を飲んでいたみたいなんだ。」

「なんかそんな名前をした赤い液体を飲んでた気がする。おいしかったし。」

「それだけでそうなるものか？」

「これは一種の麻薬中毒みたいなものさ。成長期の身体に何本も服用すれば、何をしないででも力が付いてしまう。その代わり、身体のほうは壊れてしまう」と話がずれたね。いずれにせよ話すつもりだったが……」

「アルティナの記憶について……だったな」

「パパとママのこと？」

それを聞いたのか扉の向こうにいる二人が慌てふためいている様子が頭に浮かんた。あまりでかい声は出していないのだが、どうもこの場所は防音耐性がないようだ。

少しして、二人が緊張の趣きで部屋に入ってきた。

「……そんなビクビクしなくても何もしないよ。どうせ逃げてもまた捕まえに来るだろうし」

ようやく上半身は起こせるようになったので、ベッドに腰掛ける状態で二人と向き合う。そうして薄らと笑みを浮かべながら、

「村へ帰っても、すでに遅かったわ。両親の顔すら、今じゃ思い出せない」

それを聞いて二人が目を合わせる。医者の方が眼鏡を弄り、予想通りか、と呟く。

「僕は言ったはずだよ？幼いうちから薬物乱用すると身体に影響が出るって」

医者の男はそう言うと、部屋の壁に腕を組んで寄り掛かった。

ガドスは今の少女を見て、何とも切ない気持ちになっていた。

両親の死、その報告を僅か十歳の幼い子供が受け入れることを責められる。その後村へ帰るも、すでに廃墟。そして約二年半、一人孤独にモンスターの巣窟の中、暮らしていた。

元の、人懐っこくて、両親にいつもかわいがられていた彼女のことを知っている身となれば尚更である。彼女が孤独の間、ギルドは何をしていたのだろうか？恐らく、何もしていない。歳のことなど関係なく、一度ギルドが助けたというのに、またしても自ら危険地帯へ向かったのだ。そんな奴のことなど、一々気にしていられないのだろう。

何はともあれ、友人の大事な娘は今無事にここにいる。あの頃とはかなり違うが…

「ねえ、おじさん」

「…なんだ？」

不意に少女に話しかけられる。彼女は相変わらず口元に笑みを浮かべている。その片方だけ覗く真紅の瞳は沈んでいたが。

「わたしのしてきたことって、無駄だったの力ナ？」

それに対し、ガドスはこう返す。

「お前はこう思っているんだ？」

「……………ワカンナイ」

「僕は無駄じゃないと思うよ？君は両親のことを愛していたからこそ、そうまでして村へ帰ってきたんだ。そしてその両親は…君のことは愛していたからこそ僕らに君のことを頼むよう、死に際に手紙を遣したんだろう」

医者の方がそう言って、今度は近くにある椅子に腰かける。ガドスは腰にあるポーチの中から友人からの手紙を取り出し、少女に手渡す。

「もう一度、よく見てほしい。これはお前の父親の字だろ？思い出せないのならどんなに時間が掛かってもいい…。少しずつ、確実にな」

それを見た少女からは、やはり反応がない。しかし、先程より顔

は明るくなった。

「お前は、これからどうしたい？」

ガドスは少女に問う。

「僕としては、まず身体の治療を完全にしたい。そもそも本来全治三年レベルだしね」

医者の方は眼鏡を吊り上げながら言う。

少女は…

（わたしは……）

最初はこの二人を敵対視していた。いくら両親の友人だとしても、いきなり信用するのは無理だった。手紙の内容をもう一度よく見る。

（娘を頼む…か）

親の字かどうかは全くと言っていいほど解らない。しかし、仮にこれが父親の書いた字だとしたら、この二人はわたしのことを任せられるほど信頼させられているということだ。

今はそれさえ理解できれば十分だった。

少し大きめに息を吐くと、手紙から目を離し、二人に顔を向ける。

「わたし一人でいるの疲れちゃったみたい。しばらく頼まれちゃってもいいかな？」

それを聞いた二人はお互いに笑みを浮かべ、それに釣られてわたしも笑みを浮かべていた。

帰ル場所（後書き）

次章から本格的な内容になればいいなと思ってます・見てくださ
つてる皆様には感謝感激です！これからもよろしく願いします。

全員集合（前書き）

3章開始です。

全員集合

辺りを深緑の木々に囲まれ、意図的ではなく、人工的でなく、自然にできた広場のような空間にその建物はあった。

まだ建築されてからそんなに年月が立ってないのか真新しく感じる、そんなに大きくない木造の建物。他の街にあるような、他者からの依頼を受けるギルドの酒場と丁度同じくらいの大きさだろうか。入口の前には、ここが酒場であるようなことを表すように、看板が飾ってあった。普通の商人や旅人も寄ることが多いのか、それらの物と思える竜車や杖などが外に置いてあった。

周りには、この建物以外の変わったものは一切見当たらない。

「じゃ、中入るぜ？」

「あつ…うん」

ゼノがミヤビを中へと誘う。まだ真新しく見える扉は開けるとギイ、と古めかしい音を出した。

中に入ると、自然の香りがした。これにはさすがにびっくりした。酒場と言うならば普段なら入った瞬間、酒の匂いと、人々の怒号や爆笑で埋め尽くされているものだが、ここは違った。

何より今は人の数が少ないというのもあるのだろうか、こう言った静かな空間は嫌いではなかった。何というか、心に安らぎができるのだ。

現在、視界に確認できるのは三人。それぞれハンター、商人、旅人だろうか。そこまではよく解らない。ただ三人共、入ってきたこちらに目も向けることはなかった。それぞれ別の席に座っている様子を見ると、互いに他人に興味はなさそうだ。

「あらあ、ゼノ君おかえりなさい」

甘ったるい声に振り返るとそこには一人の女性が立っていた。この酒場の店員だろうか（ゼノがギルドと言うのだから受付嬢かなんかだろうが）。パツと見た感じでも解るほど若く、作業服の上から

でも解るほどスタイルがいい。そして何より

(…勝てる気がしない)

「ああ、エフィさん」

そのエフィさんと呼ばれる人は良く知る顔以外、自分の胸を見て何やらブツブツ言っている少女に対し、その子は？とゼノに聞く。

「依頼先で拾いました」

「え？えっと、まあ…そんな感じです…」

そうするとエフィは困ったように溜息を吐き、頬に手を当てる。

「そうなのぉ…困ったわね、今マスターいないのよ。あつ…いるかもしれないじゃなくてホントにいないのよ？だから詳しい話はまた後でいいかしら？」

「はあ…」

何やら展開にあまり付いていけないがとりあえずこの酒場のマスターが不在のようなので話はそれからだそうだ。

「ごめんね」とエフィが言いながら近くの席に二人を案内し、飲み物とその他もろもろ持て来るわく、と言って奥に行ってしまった。その他と言うのは依頼関係のものだろうか？

ふう、と溜息を吐く。

「どした？」

ゼノが両手を後頭部で組み、背中をソファの背もたれに預けた状態で聞いてくる。因みに二人が座っているのはカウンター前の背もたれ付きの小さな椅子である。つまり隣同士で座っている。

「いや、なんかイメージと違うな、ってね」

改めて店の中を見回す。相変わらず他の人間はこちらに顔を向けようとしてもしないが、今はそれはそれで助かる。変に絡まれたらどうしようかとも考えていたところだし。

「ま、今みんないないみたいだしな。本来ならもう少し人はいるよ」

「…そうなんだ？」

とりあえずエフィが戻ってくるまでここに来て気になることを聞

くことにした。

「ここに来ている商人や旅人はここをギルドって知っているの？」

「いや、知らないんじゃないか？ なんとなく勘づいたりはしているだろうけど、表向きはただの酒場だからな。だから前に言ったように普通の依頼は置いてないのさ」

ふうん、と適当に返事をして、カウンターの上に両手を組んでその上に顎を乗せる。普通の依頼は置いてないと言ってはいるが、目の前に『凍土！ 採取ツアー』という張り紙を発見してしまった。とりあえず気にしないことにした。

「おまたせ」

そう言ってエフィが戻ってきた。右手にはビールの入った杯が二つ。左手には何枚かの用紙を抱えていた。それらをカウンターのうへと置く。

互いにビールの入った杯を貰うと、それを一口含む。独特な苦みと、よく冷えた液体が喉を潤してくれる。ゼノはそのまま置かれた書類に目を通す。

そこには今回の恐暴竜の件について書かれていた。それ見てそういえば、とポーチの中から剥ぎ取った恐暴竜の黒鱗をエフィに見せる。

「ほいこれ、証拠の品」

それを見たエフィは、先ほどよりもさらに困った顔をしていた。

額に汗を浮かべ、うん、と唸っている。

「どうしたんですか…？」

「いや、あのねえ…」

隣にいるミヤビもその反応に眉をひそめる。明らかに何かある。二人して追い詰めるような眼差しを向ける。その様子に観念したのかエフィは口を開く。

「あう…。一応確認なんだけど、それはあなたが倒した奴…額に傷のある奴の物で間違いない？」

奴と言つのは恐暴竜イビルジョーのことで間違いないだろう。そしてゼノ達が戦った奴には確かに額にダメージを与えた記憶がある。決して自分達が与えたわけではないが。

それを肯定と見たのかエフィは真剣な顔で二人に告げる。

「そいつ……………まだ生きてるわ」

ガドス・ガルハートは知人の研究所（本当に研究所かは微妙なことだが）から、ギルドへの帰路を歩いていった。実は知人の住む場所からギルドへはそう離れておらず、徒歩なら三時間ほど、竜車ならその半分ほどだ。対して苦になる距離でもないので、竜車を操るアイルーにはここからは自分を乗せる必要はないと、予め断っておいた。そのため、今は愛用の装備を纏って、歩いて帰ってきている。

「あそこがギルドってトコ？」

三人で。

「……………まあ、そうなんだが」

「いやあ、ようやくかね。久しぶりにこんな歩いたよ」

三人の目の前には、森に囲まれ、自然にできた広場にひっそりと佇む木造の建物が見えていた。

「あそこに行くのも久しぶりだねえ」

「…ジエイル」

若干怒りを含んだ声で名前を呼ばれ、白衣を着た男　ジエイルは両手を前に出して制止を試みる。

「とつとつ。まあ、そんな怒らないでよ。仕様が無いじゃないか。彼女が付いてきたいって言うんだし、僕としても患者は最後まで見届けたい」

彼女と言つのは、凍土の村で出会った少女、アルティナのことである。

ジエイルの研究所を出発する際、何があつたかガドスは良く知らないが、一人で帰るはずだったのに何時の間にか二人が付いてきて

しまっていたのだ。最初は勿論反対した。傷が癒えてないと言っておきながら何故連れてきた、と。しかし何をきっかけにか、出会った時とは打って変わって元気そうな彼女を見ているうちにどうでもよくなってしまうた。しかし、いざギルドを前にするとやはり中には入れたくない。元より未成年が入るようなところではない。

それも…

「…ねえ、中に入んないノ？」

扉の前で大人の男二人と子供な少女が固まっている。見方によっては子供が親に玩具屋に入ってと強請るような部分でもあるが、入る店が明らかにおかしい。事情を知らない人が見たら即通報されるかもしれない。アルティナ自身はそんなこと気にもしていないように、早く中に入りたそうだ。さて、どうしたものかと真剣に考えている時、

「なああああああああああ！？」

聞き覚えのある声が店の名から響いてきた。

何があつたか気になるし、暴動だったらそれはそれで止めに入らねばならない。とにかくこのままこうやって外に突っ立ても仕方がない。もうここまで来てしまったのだし。ガドスは覚悟を決め、まだ真新しく見える扉を思い切り開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2384m/>

モンスターハンターエクストラ

2010年10月21日18時06分発行